

女学生が綴った「特攻日記」の基礎的研究

八 卷 聡

はじめに

太平洋戦争末期、本土最南端にあった知覧飛行場には各地から陸軍の特攻隊が前進し、沖縄に襲来した敵艦船を目指して出撃していった。

知覧での滞在期間は数日と長くはないが、隊員の身の回りの世話をするため、地元の知覧高等女学校に奉仕作業の依頼があり、昭和二十年（一九四五）三月二十七日から四月十八日までの二十三日間、十四〜十五歳の女学生が三角兵舎に赴き、洗濯や縫物、兵舎の清掃などに従事した。

単に作業を行うだけでなく、話し相手にもなり、一緒に歌をうたうなど親密な交流を持ち、出撃の際は見送りもした。

女学生の一人、前田 笙子はその間の出来事を克明に日記に綴った。

そこには自身の行動や心情だけでなく接した特攻隊員の言動やその時の様子、隊員間の人間関係や人柄、そして、隊の移動や出撃状況など、軍の情報も詳細に書かれている。

戦時中は紙自体の入手が困難で、かつ軍に関する事を書き残すことは憚れていた。戦後は特攻隊員との交流を示すものは処分するよう教諭から指示されるなど、この日記が現存しない要素はいくつもあった。書き残さねばならないという思い、そして残そうとする行動がなければこれらの出来事は歴史から消え失せていた。

まさに、運命的な巡り合わせにより交流を持ち、奇跡的に残された記録である。

この特攻日記は、高木 俊朗氏が昭和三十九年（一九六四）十一月十三号から昭和四十年（一九六五）七月三十号まで続けた週刊朝日の連載の中で紹介され、多くの人が目にするようになった。連載後は「知覧」と書籍化もされている。

昭和五十四年（一九七九）には、知覧高等女学校の同窓会である知覧高女なでしこ会より「知覧特攻基地」が出され、昭和五十七年（一九八二）に発行された知覧町郷土史にも特攻日記が掲載されるなど、今まで多くの書籍で活字化された内容が紹介されている。

特に高木 俊朗氏の著書では日記の筆者である前田 笙子、日記に名前が出て来る生き残りの特攻隊員、河崎 広光にも取材を行い、当時の実情を紹介している。

このように多くの書籍で紹介されてはいたが、特攻日記を歴史資料として捉えて分析し、読み解いて特攻についての考察を深める研究までは進展していなかった。

特攻日記は平成二十七年（二〇一五）七月に特攻戦没者の手記十八点と共に南九州市の市指定有形文化財（歴史資料）に指定され、文化財として位置づけられた。しかしながら、歴史資料も考察がされていなければ本当の意味で歴史資料とはまだ呼べない。

本稿では、特攻日記の原文を写真で掲載し、筆者である永崎 笙子氏（旧姓・前田）への聞き取り調査を紹介する。そして、各日の記述内容の考察を行い、特攻作戦の一端を明らかにする取り組みを行った。

軍の公文書は終戦時に焼却処分され、ほとんど残っていない。個人の記録からどのような特攻作戦の実情が読み取れるのか、歴史資料としての重要性を検証していく。

一・資料紹介「特攻日記」

表紙にNOTE BOOKと馬に跨った騎士のイラストが大きく描かれ、右下には製造メーカーと考えられるSPARTAの刻印がある。

155×200mmサイズのリングノートで表紙と裏表紙は厚紙で、中紙は縦に点線の罫線が入り二十枚、四十ページからなっている。

日記の構成は一ページから十三ページまでは奉仕作業に就いた日々（昭和二十年三月二十七日から四月十八日）の出来事が書かれ、ここまでで一旦、「特攻日記 終わり」と結んである。同ページから十六ページまでは交流を持った特攻隊員の人物像、受け取った形見の一覧が書かれている。

十七ページは「三角兵舎慰問 その後の消息」と、生き残った特攻隊員と戦後に取られた交信の履歴が箇条書きにされている。

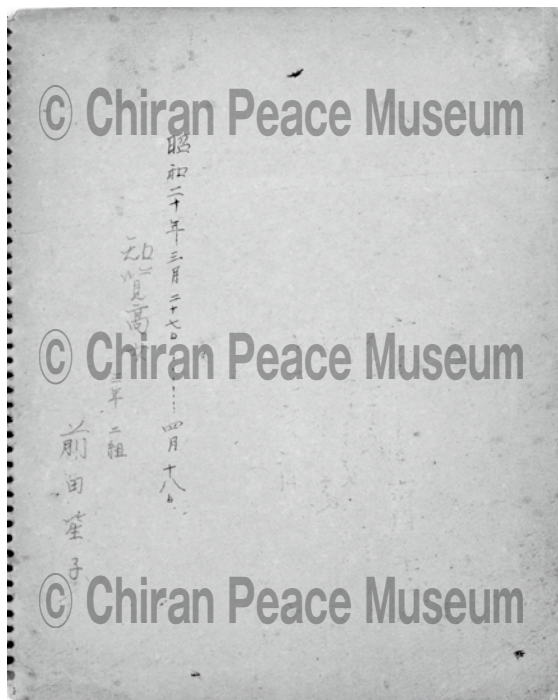
十八ページから三十二ページまでは特攻隊員に書いてもらった筆跡が残されている。別紙に書いてもらったものもあり、二十ページには押し花が挟まれている。

三十三ページから最後の四十ページまでは特攻隊員の実家の住所、両親及び兄弟の名前が記され、三十三ページには三角兵舎で取材を受けた新聞記事（鹿児島日報 昭和二十年四月十九日）の切り抜きが貼付してある。

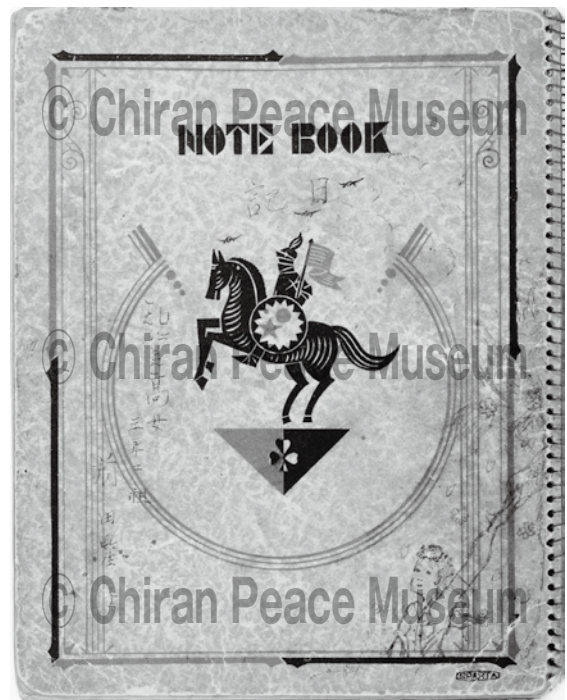
裏表紙裏にも新聞社、発行日が不明だが第十九振武隊員を紹介する新聞記事の切り抜きが貼付してある。

本稿では、特攻隊員との交流が記された一ページから十六ページまでを紹介する。

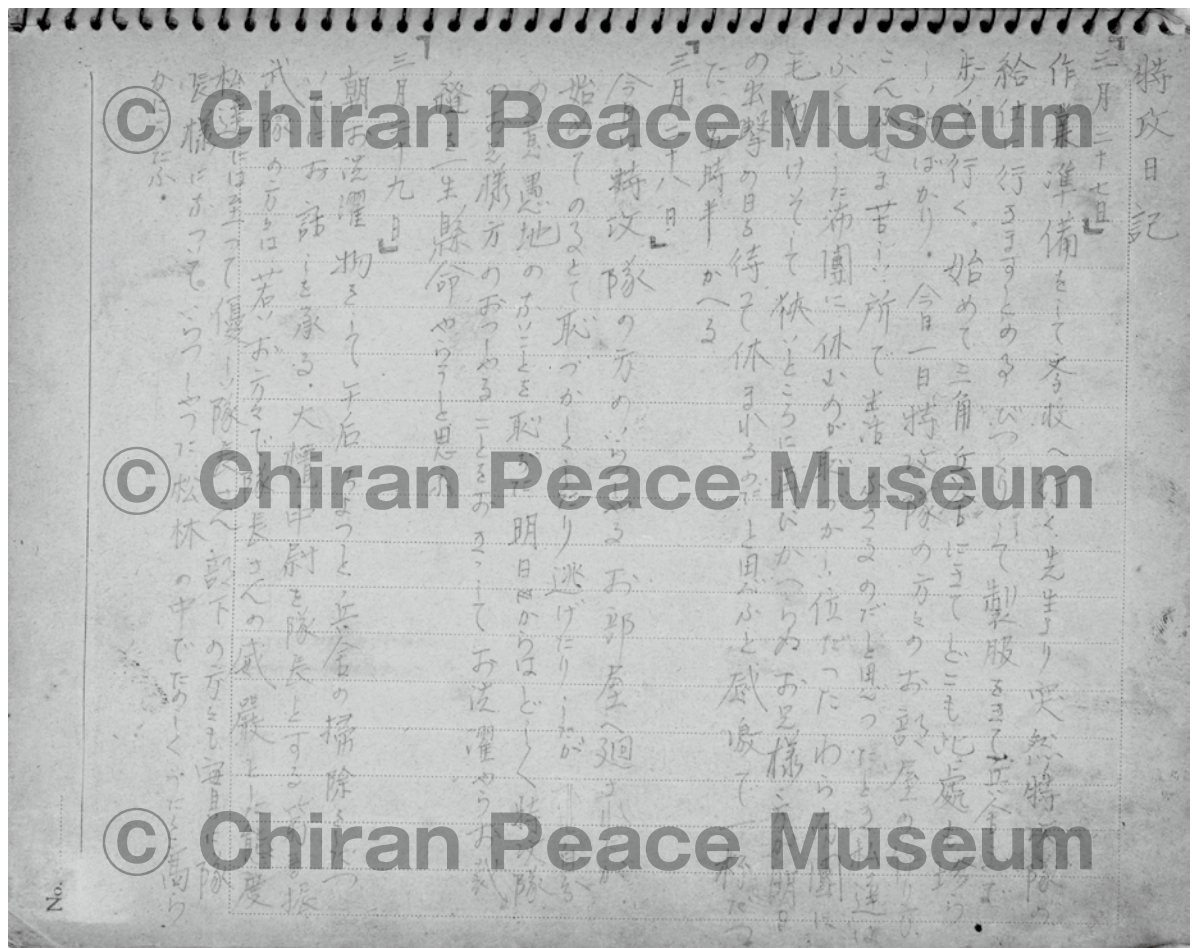
活字化は可能な限り原文に忠実となるようにしたが、読みやすさを考慮し、一部、体裁を整え、句読点を追加した。また、明らかに誤字と考えられる字は下に（ ）で想定される字を表記した。



表紙裏



表紙



特攻日記

「三月二十七日」

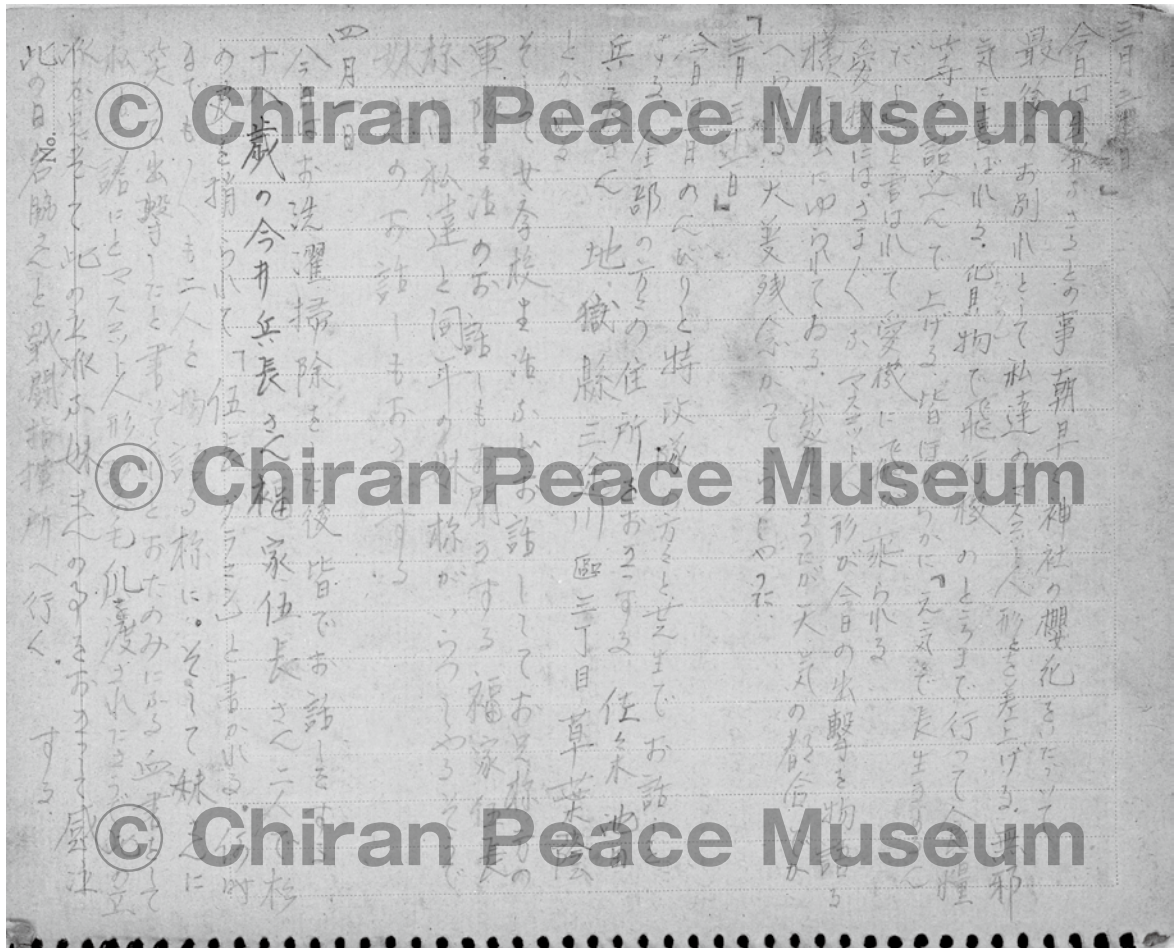
作業準備をして学校へ行く。先生より突然特攻隊の給仕に行きますとの事、びっくりして製(制)服をきて兵舎まで歩いて行く。始(初)めて三角兵舎にきてどこも此處も珍らしい物ばかり。今日一日特攻隊の方々のお部屋の作り方。こんなせま苦しい所で生活なさるのだと思ったとき私達はぶくぶくした布團に休むのが恥づかしい位だった。わら布團に毛布だけ、そして狭いところに再びかへらぬお兄様方が明日の出撃の日を待って休まれるのだと思ふと感激で一杯だった。五時半かへる。

「三月二十八日」

今日は特攻隊の方のいらっしゃるお部屋へ廻されたが、始(初)めての事とて恥づかししたり逃げたりしたが、自分の意愚(氣)地のないことを恥ぢた。明日からはどしどし特攻隊のお兄様方のおっしゃることをおき、して、お洗濯やらお裁縫を一生懸命やらうと思ふ。

「三月二十九日」

朝お洗濯物をして午后ちよつと兵舎の掃除をしたついでにお話しを承る。大櫃中尉を隊長とする第三〇振武隊の方々は若いお方で隊長さんの威厳とした態度私達には至って優しい隊長さん部下の方々も實に隊長様になつていらっしゃった。松林の中でのしく高らかにうたふ。



「三月三十日」

今日はお発なさるとの事。朝早く神社の櫻花をいたゞいて最後のお別れとして私達のマスコット人形とを差上げる。無邪気に喜ばれる。貨物で飛行機のところまで行つて食糧等を詰込んで上げる。皆はがらかに「元気で長生きするんだよ」と言はれて愛機に飛び乗られる。愛機には、さまざまなマスコット人形が今日の出撃を物語る様に風にゆられてゐる。お発なさったが天氣の都合でかへられる。大変残念がついていらつしやった。

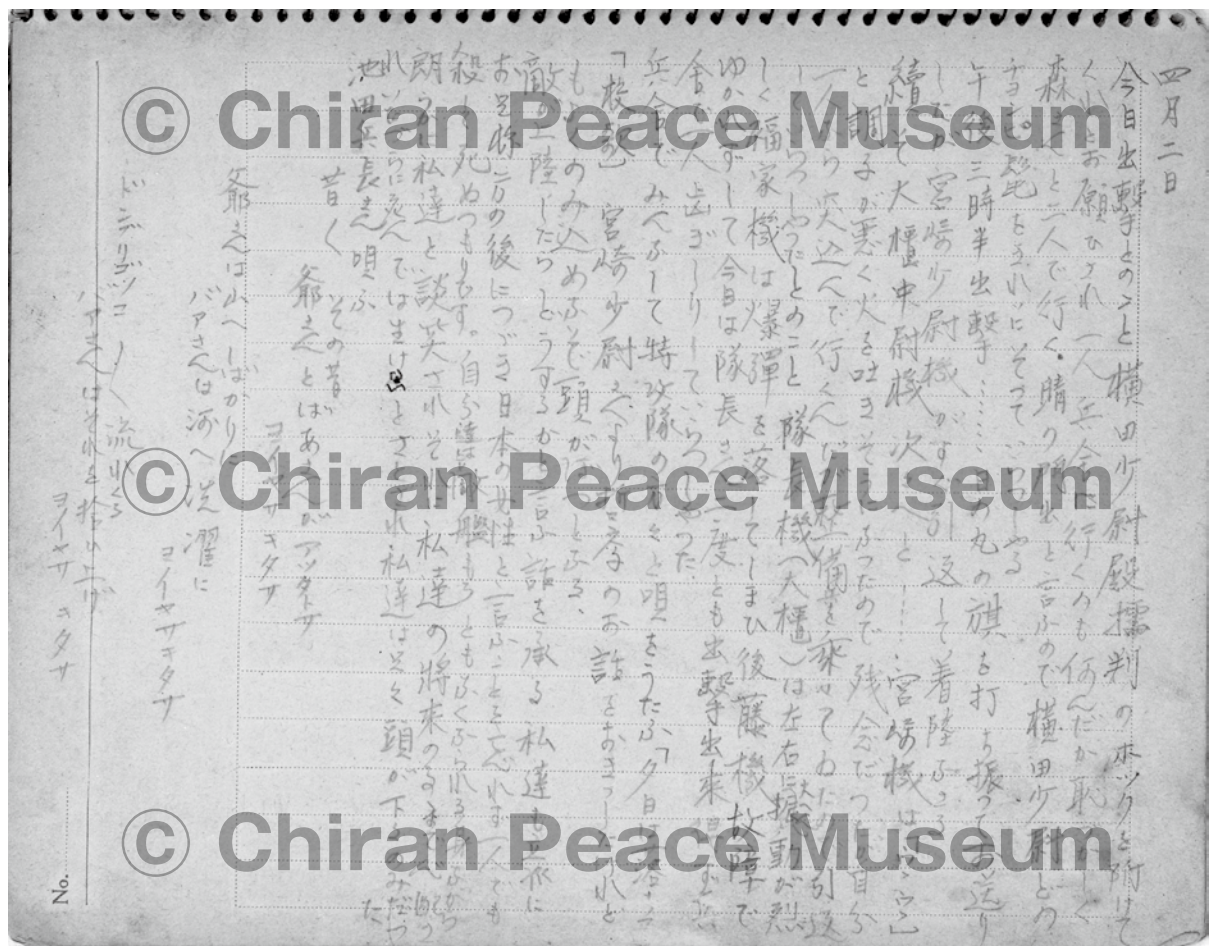
「三月三十一日」

今日是一日のんびりと特攻隊の方々と芝生でお話しをする。全部の方々の住所をおき、する。佐々木、池田兵長さん、地獄縣三途川區三丁目草葉蔭とか、れる。

そして女学校生活などお話ししてお兄様方の軍隊生活のお話しもお聞きする。福家伍長様には私達と同年の妹様がいらつしやるそうで妹さんのお話しもおき、する。

「四月一日」

今日はお洗濯、掃除をした後皆でお話しをする。十八歳の今井兵長さん、福家伍長さん二人で杉の皮を削られて「伍長グラマン」と書かれる。何時までも何時までも二人を物語る様に。そして妹さんに笑つて出撃したと書いてくれとおたのみになる。血書をして私も一諸(緒)にとマスコット人形、髪の毛、爪を渡されたさうで、此の立派な兄、そして此の立派な妹さんの事をおききして感泣する。此の日、岩脇さんと戦闘指揮所へ行く。



「四月二日」

今日出撃とのこと、横田少尉殿、儒判（裨）のホックを付けてくれとお願ひされ一人兵舎に行くのも何んだか恥づかし森さんと二人で行く。晴の門出と言ふので横田少尉どのチヨビ髭をきれいにそっていらつしやる。

午後三時半出撃・・・日の丸の旗を打ち振ってお送りしたが宮崎少尉機がすぐ引返して着陸なさる。

続いて大櫃中尉機、次々と・・・宮崎機は「ウ、ウ、」と調子が悪く火を吐きそうになったので残念だったが、自分一人なら突込んで行くんだが整備兵を乗せてゐたので引返していらつしやつたとのこと。隊長機（大櫃）は左右に大へん振動が烈

しく福家機は爆弾を落してしまひ後藤機故障でゆかれずして今日は隊長さん二度とも出撃出来得ず兵舎で一人歯ざしりしていらつしやつた。

兵舎でみんなして特攻隊の方々と唄をうたふ。「夕日は落ちて」「校歌」宮崎少尉さんより哲孝のお話をおき、したけれど

もよくのみ込めないで頭がぼうつとなる。敵が上陸したらどうするかと言ふ話を承る。私達も立派にお兄様方の後につぎ日本の女性と言ふことを忘れず一人でも殺して死ぬつもりです。自分達は敵艦もろともなくなる身ながら朗らかに私達と談笑され、それに私達の将来の事まで心配されいたづらに死んでは生(い)けないとさとされ、私達は只々頭が下るのみだつた。

池田兵長さん唄ふ。

昔々その昔

爺さんとばあさんがアツタトサ

ヨイヤサキタサ

爺さんは山へしばかりに

バアさんは河へ洗濯に

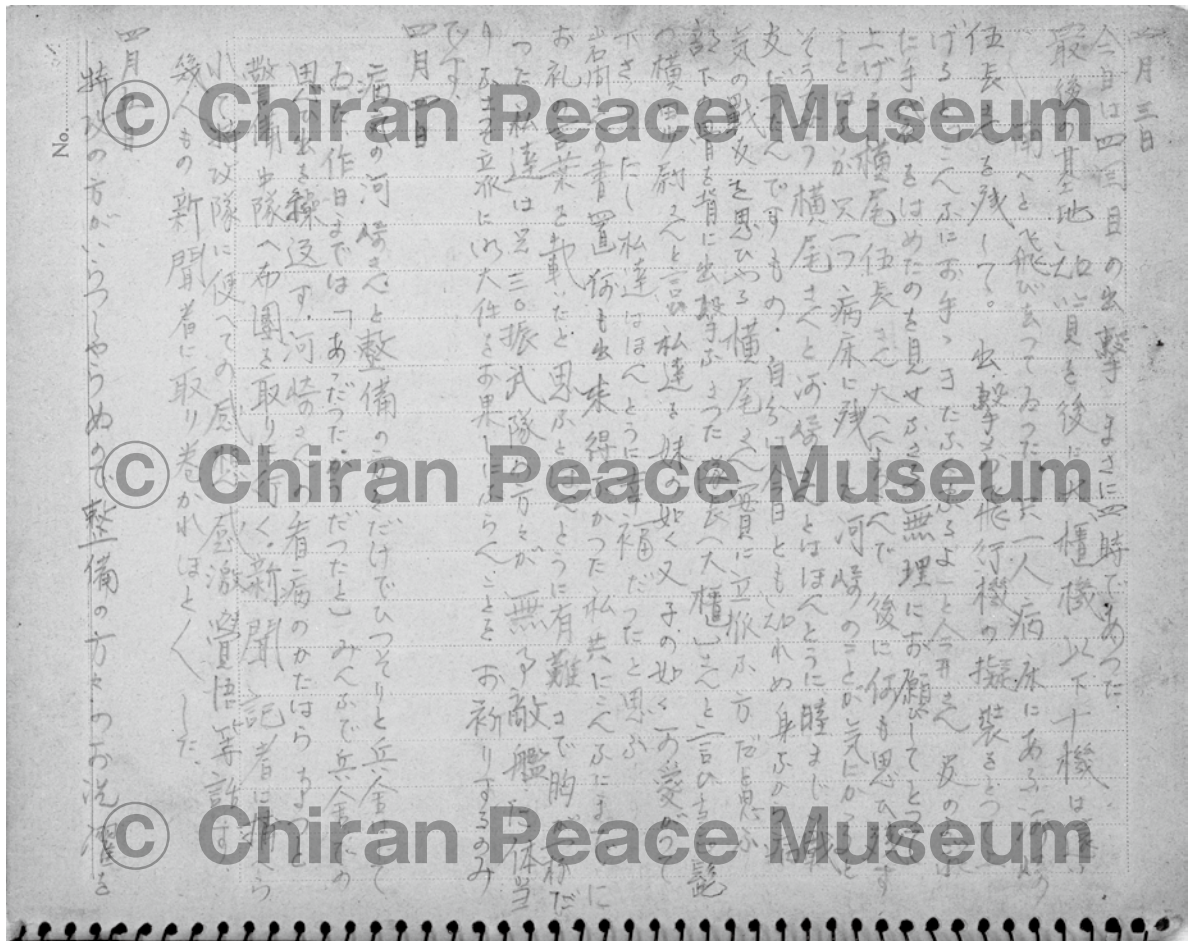
ヨイヤサキタサ

ドンブリゴッコ ドンブリゴッコ

流れくる

バアさんはそれを拾ひ上げ

ヨイヤサキタサ



「四月三日」

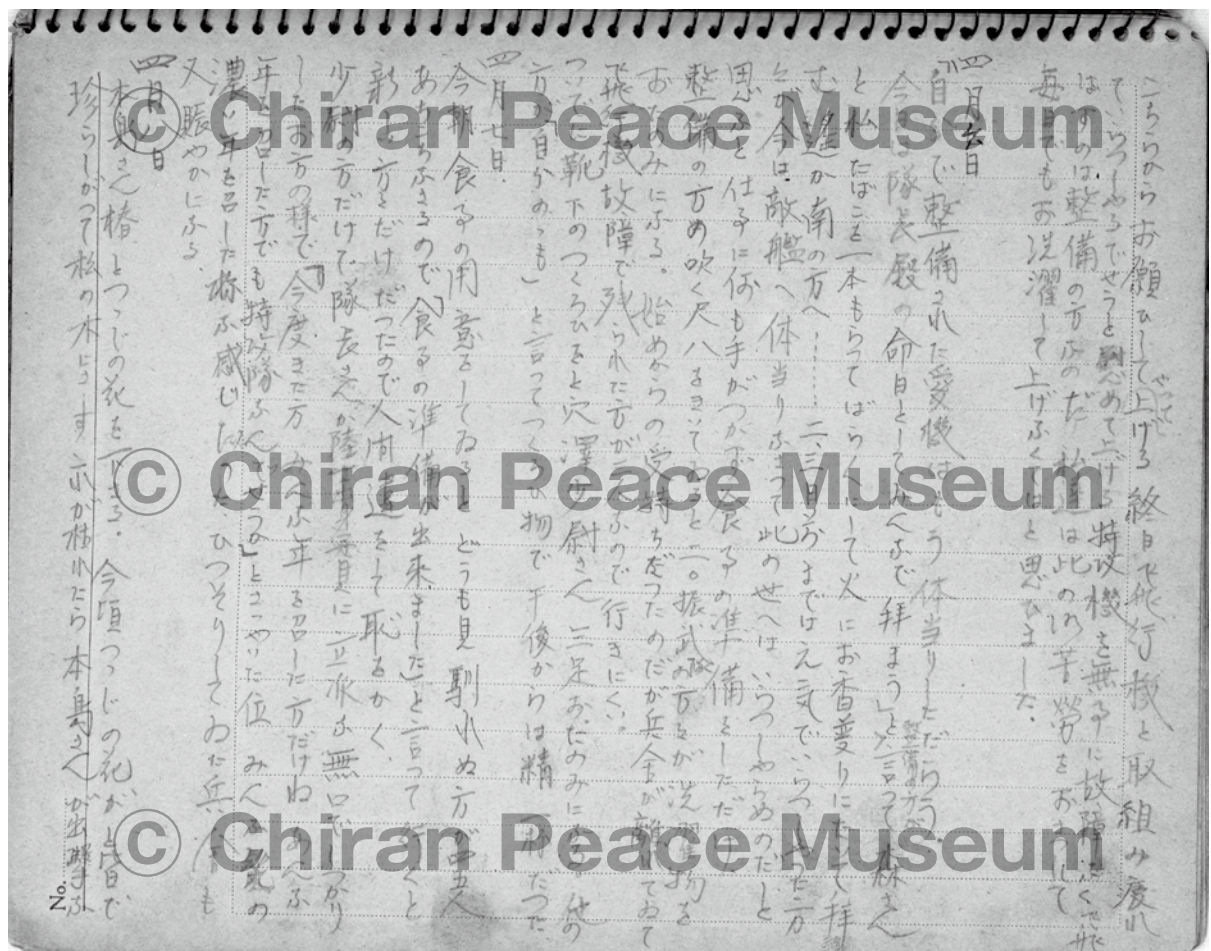
今日は四回目の出撃、まさに四時であった。最後の基地知覧を後に大櫃機以下十機は遠い遠い南へと飛び去ってゐた。只一人病床にある河崎伍長さんを残して。出撃前、飛行機の擬装をとって上げると「こんなにお手々きたなくなるよ」と今井さん、皮のよごれを手袋をはめたのを見せなされる。無理にお願ひしてとって上げる。横尾伍長さん大へんよろこんで後に何も思ひ残すことはないが、只一つ病床に残した河崎のことが気にかかる。そうでせう横尾さんと河崎さんとはほんとうに睦まじい戦友だったんですもの。自分は今日とも知れぬ身ながら病気の戦友を思ひやる横尾さん實に立派な方だと思ふ。部下の骨を背に出撃なさった隊長（大櫃）さんと言ひチヨビ髭の横田少尉さんと言ひ私達を妹の如く又、子の如く可愛がって下さったし私達はほんとうに幸福だったと思ふ。岩間さんの書置、何も出来得なかつた私共にこんなにまでにお礼の言葉を載（戴）いたと思ふとほんとうに有難さで胸が一杯だった。私達は只三〇振武隊の方々が無事敵艦に体当たりなさって立派に御大任をお果しにならんことをお祈りするのみです。

「四月四日」

病気の河崎さんと整備の方々だけでひっそりと兵舎はしてゐた。作（昨）日までは「あ、だった。かうだったと」みんなで兵舎での思ひ出を繰返す。河崎さんの看病のかたはらちよつと警備中隊へ布團を取りに行く。新聞記者に捕へられて特攻隊に使へての感想、感激、覚悟等話す。幾人もの新聞記者に取り巻かれほとほとした。

「四月五日」

特攻の方がいらつしやらぬので整備の方々のお洗濯を



こちらからお願ひしてやって上げる。終日飛行機と取組み疲れ
ていらつしやるでせうと慰めて上げる。特攻機を無事に故障なく飛
ばすのは整備の方なのだ。私達は此の御苦勞をおさつして
毎日でもお洗濯して上げなくてはと思ひました。

「四月六日」

「自分で整備された愛機はもう体当たりしただらう。」

今日は隊長殿の命日としてみんなで拜まう」と整備の方が言つて森さん
と私、たばこを一本もらつてばらばらにして火にお香変りにたいて拜
む。遙か南の方へ・・・二、三日前までは元気でいらつしやた方
々が今は、敵艦へ体当りなさつて此の世へはいらっしゃらぬのだと
思ふと仕事に何も手がつかず食事の準備をしただけ。

整備の方の吹く尺八をきいてゐると二〇振武隊の方々が洗濯物を
おたのみになる。始めからの受持ちだったのだが、兵舎が離れてゐて
飛行機故障で残られた方が三人なので行きにくい。

ついでに靴下のつくろひをと穴澤少尉さん三足おたのみになる。他の
方が「自分の、も」と言つてつくろひ物で午後からは精一杯だった。

「四月七日」

今朝、食事の用意をしてゐると、どうも見馴れぬ方が四、五人
あちこちなさるので「食事の準備が出来ました」と言つて行くと、
新しい方々だけだったので人間違をして恥をかく。

少尉の方だけで、隊長さんが陸士出身、實に立派な無口でしつかり
したお方の様で「今度きた方みんなお年を召した方だけね、あんな
年を召した方でも特攻隊なんですか」とさ、やいた位。みんな髭の
濃い年を召した様な感じだった。ひっそりしてゐた兵舎も
又賑やかになる。

「四月八日」

本島さん、椿とつ、じの花を下さる。今頃つ、じの花がと皆で
珍らしがって松の木にさす。これが枯れたら本島さんが出撃な



さって体当たりなさったときよと話し合つてさす。
 渡井さんより静岡の女学校で載(戴)いたと言ふマスコットを載(戴)く。
 穴澤少尉さん曰く、「何時も貴方達は俺達の兵舎へきてくれぬ。何
 故だ。洗濯物だつてあるんだよ」と言つて連れて行かれる。行つて見る
 と何んの用事なしでぼかんとした。大平少尉さん、穴澤少尉さん
 のお話に答へるだけ。雨が降つてゐて洗濯に行つたままの姿でき
 てしまつたのでみんな素足、さんざん冷やかされて兵舎を飛び
 出す。

「四月九日」

今日はお洗濯、お掃除をして兵舎へ用ぎきに行く。
 河崎さんも近頃よくなつて兵舎の外へも出られる様になった。
 洗濯のついでに整備の方の漁(魚)取りを見に行く。小泉さんと
 河崎さん土手から河へすつてんコロリン。危いところぬれね
 ずみになるところを木元さんがだきとめる。電気で水中に火花を
 ちらして取るのだそうで、ピチピチ筒先から火花をちらすと
 一匹魚がぷつと白い腹をみせて浮かんだ。電熱が弱
 いため駄目で全部魚は逃げてしまつた。福家兵長さんの
 妹さんへ最後を書いて出す。

「四月十日」

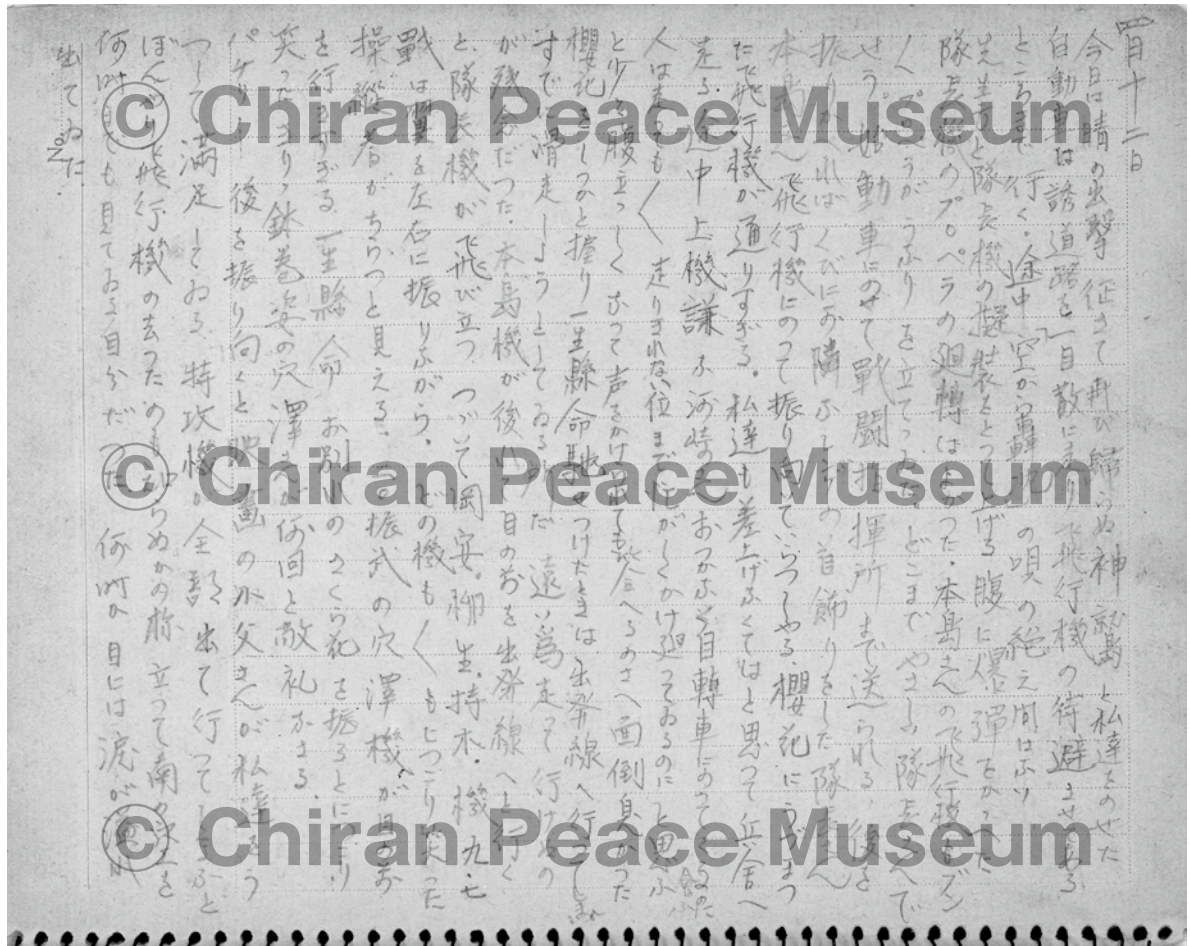
今朝中に仕事をすませて午後より慰問團の舞踊
 を見物に行く。池田隊長、岡安、本島、渡井さんと共に
 早いで小高い畠に遊びに行く。「空から轟沈」のうたを高ら
 かにうたふ。無口な隊長さんまでが無邪気に唄われる。隊長さん
 「此の甘藍は巻くだらうか」と心配していぢられた。渡井さん、「自分な
 んか、キャベツと言ひますよ」岡安さん「僕は玉菜と言ふよ」はて
 はて隊長さん思わず部下のじょう談には苦笑される。渡井
 さん何時の間にか國民学校の子をつれてくる。



一人で何かぶつぶつ言ひ乍ら。隊長さん「どうもあの渡井にはかなわぬよ」
 おまへは特攻隊になりたいかと聞いたなら、その子供の言ふに「僕は
 なりたくない。長生きをしたい」と言つたそう。子供にやさしい隊長さん
 航空糧食をやる、受取らうとしたとき大きな唐芋がべたり
 湯(茹)でたてのほやほやがべしやんこになる。みんなして大笑ひ。そのとき
 自動車がきたので隊長さん一人で走って行かれたが、ガンガンを山の様
 につんだ自動車なので隊長さん頭を掻き掻き登っていらつしやる。
 又トラックがくる。本島さん「止めてくれ」の一聲、踊子をのせた自動
 車はびたりと止る。それにのつて見に行く。しかし時間のため又すぐ歸
 る。みんな町へ外出なさる。

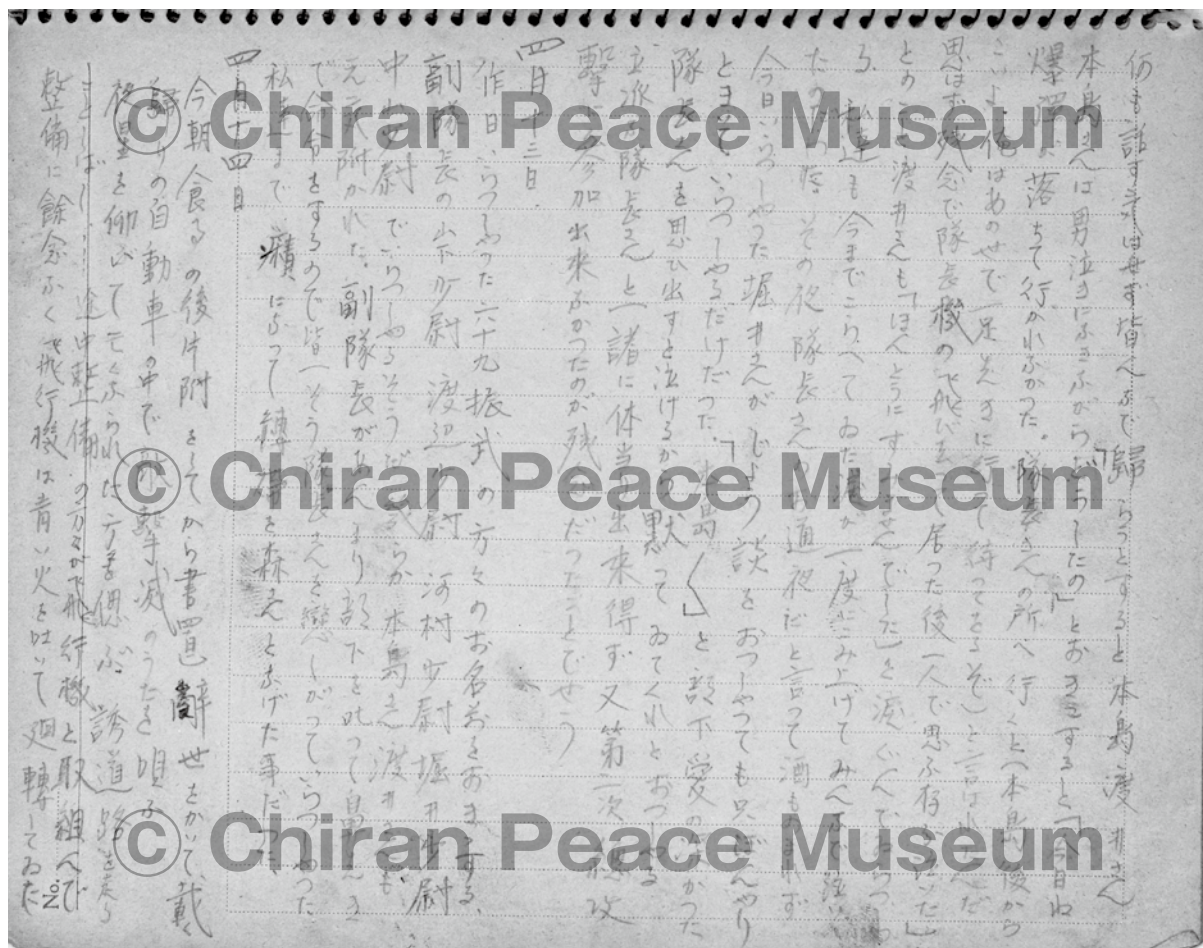
「四月十一日」

午前中、洗濯、縫物、掃除をすまして食事の後片付けも終へ、
 午後から同部隊の特攻機が五機つく筈なので迎へに行く。
 戦闘指揮所で隊長、本島、岡安、渡井さんと共にまつ中二機
 着陸する。隊長さん事の外お喜び、二人の部下の方々も
 大へんよろこんで居られた。今から出撃までお世話になるからと
 あいさつをなさる。「明日出撃だ。お前達もくる早々征くか」と
 おつしやると「一しよに征きます」と元氣なこゑでおつしやる。
 その晩二〇振武隊、六十九振武隊、三〇振武隊のお別れの會が食堂
 であった。特別九時まで時間をもらつて給仕をする。前に隊長さん
 住所をかいてやるから家に出撃した事を知らせてくれとお願ひされた
 のを思ひつき、酔ふていらつしやつたけど住所をおき、する。酒臭いいきを
 吹かけながら優しくかいて下さる。「空から轟沈」のうたを唄ふ。あ
 りつたけの声でうたふつもりだったが、何故か聲がつまって涙が溢れ出
 てきた。森さんも「出ませう」といふて兵舎の外で思ふ存分泣いた。
 私達の涙は決して決して未練の涙ではなかつたのです。明日
 はあの世へと敵艦もろともなくなる身ながら、今夜はにつこり笑
 って酔ひ戯れていらつしやる姿を拜見したとき、あ、これでこそ
 日本は強いのだとあんまりにも嬉しく有難い涙だったのです。
 岡安さん、よふて自動車にぶら下つてお礼を言はれる。何んと立派な
 方々ばかりでせう。森さんと抱き合つて泣いた。



「四月十二日」

今日は晴の出撃、征きて再び歸らぬ神鷲と私達をのせた自動車は誘導路を一目散に走り飛行機の待避させてあるところまで行く。途中「空から轟沈」の唄の絶え間はない。先生方と隊長機の擬装をとって上げる。腹に爆弾をかへた隊長機のプロペラの廻轉はよかった。本島さんの飛行機もブンブンプロペラがうなりを立て、ゐた。どこまでやさしい隊長さんでせう。始動車にのせて戦闘指揮所まで送られる。後を振りかへればくびに可憐なレンゲの首飾りをした隊長さん、本島さん飛行機にのつて振り向いていらつしやる。櫻花にうづまつた飛行機が通りすぎる。私達も差上げなくてはと思つて兵舎へ走る。途中、上機謙(嫌)な河崎さんおつかなく自転車にのつてくるのに會ふ人は走つても走つても走りきれない位まで忙がしくかけ廻つてゐるのと思ふと少々腹立、しくなつて声をかけられても答へるのさへ面倒臭かった。櫻花をしつか(り)と握り一生懸命馳せつけたときは出発線へ行つてしまひ、すでに滑走しようとしてゐる所だ。遠い爲走つて行けぬのが残念だった。本島機が後れて目の前を出発線へと行く。と、隊長機が飛び立つ。つゞいて岡安、柳生、持木機、九七戦は翼を左右に振りながら、どの機もどの機もにっこり笑った。操縦者がちらつと見える。二〇振武の穴澤機が目の前を行きすぎる。一生懸命お別れのさくら花を振るとにっこり笑った。きり、鉢巻姿の穴澤さんが何回と敬礼なさる。パチリ・・・後を振り向くと映畫の小父さんが私達をうつつして満足してゐる。特攻機が全部出て行つてしまふとぼんやり飛行機の去つたのも知らぬかの様立つて南の空を何時までも見てゐる自分だった。何時か目には涙が溢れ出てゐた。



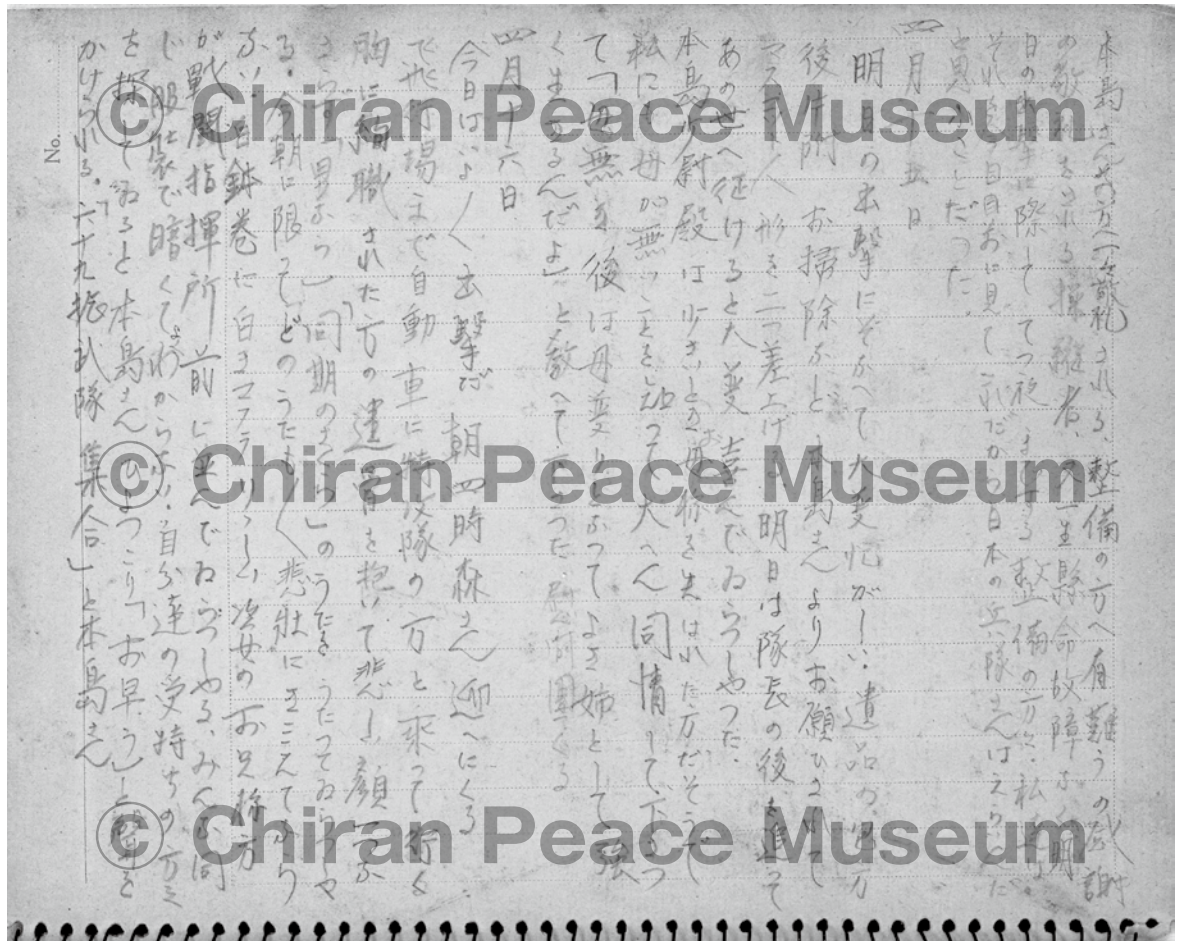
何も話す気はせず皆んなで歸らうとすると、本島、渡井さん
 本島さんは男泣きになきながら「どうしたの」とおききすると「今日ね、
 爆弾が落ちて行かれなかった。隊長さんの所へ行くと（本島、後から
 こいよ。俺はあの世で一足先きに行つて待つてをるぞ）」と言はれたんだ。
 思はず残念で隊長機の飛び去つて居つた後、一人で思ふ存分泣いた」
 とのこと。渡井さんも「ほんとうにすみませんでした」と涙ぐんでゐる。私達も
 今までこらへてゐた涙が一度にこみ上げてみんで泣いたのだつた。その夜、隊長さんのお通夜だと言つて酒ものまれず
 今日いらつしやつた堀井さんがじょう談をおつしやつても只ぼんやり
 と書いていらつしやるだけだつた。「本島、本島」と部下愛の深かつた
 隊長さんを思ひ出すと泣けるから黙つてゐてくれとおつしやる。
 立派な隊長さんと一諸（緒）に体当り出来得ず又第二次總攻
 撃に参加出来なかつたのが残念だつたこととせう。

「四月十三日」

作（昨）日いらつしやつた六十九振武の方々のお名前をおき、する。
 副隊長の山下少尉、渡辺少尉、河村少尉、堀井少尉、
 中山少尉でいらつしやるそうだ。幾らか本島さん、渡井さんも
 元氣附かれた。副隊長さんがあんまり部下を叱つて鼻先き
 で命令をするので皆一そう隊長さんを戀しがっていらつした。
 私達まで癪になつて縛帯を森さんとなげた事だつた。

「四月十四日」

今朝、食事の後片附をしてから書置、辭世をかいで載（戴）く。
 歸りの自動車の中で敵撃滅のうたを唄ふ。
 夜星を仰いで亡くなられた方々を偲ぶ。誘導路を走る
 ことしばし・・・途中整備の方々が飛行機と取組んで
 整備に餘念なく、飛行機は青い火を吐いて廻轉してゐた。



本島さんはその方へ一々敬礼される。整備の方へ有難うの感謝の敬礼をされる操縦者。又、一生懸命故障なく明日の出撃に際しててつ夜までする整備の方々。私達はそれを今日目前に見て、これだから日本の兵隊さんはえらいんだと思ふことだった。

「四月十五日」

明日の出撃にそなへて大変忙がしい。遺品の包方、後片附、お掃除など。本島さんよりお願ひされてマスコット人形を二つ差上げる。明日は隊長の後を追ってあの世へ征けると大変喜んでゐらっしゃった。

本島少尉殿は小さいときお母様を失はれた方だそうで私にも母が無いことを知って大へん同情して下さって「母無き後は母変りとなつてよき姉として強く生きるんだよ」と教へて下さった。慰問團くる。

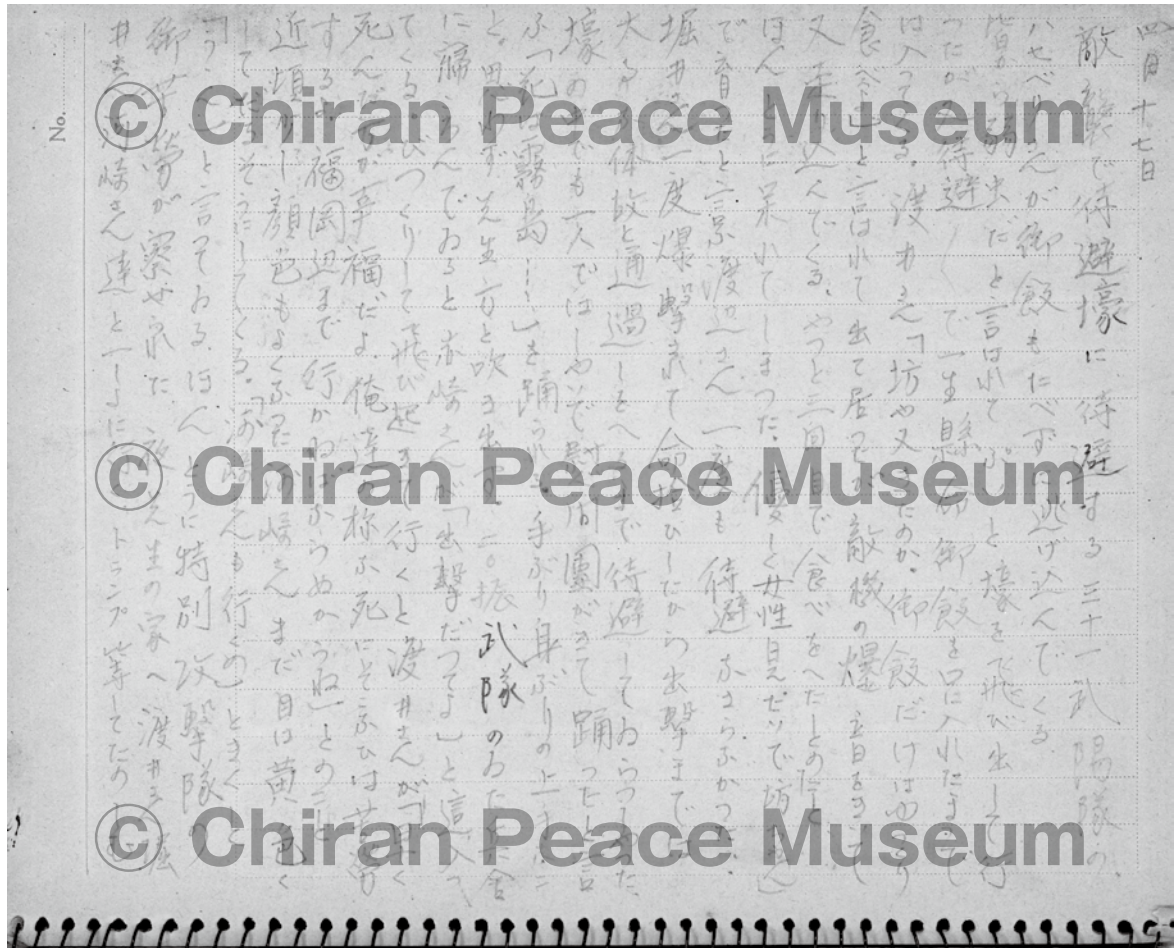
「四月十六日」

今日はいよいよ出撃だ。朝四時、森さん迎へにくる。飛行場まで自動車に特攻隊の方と乗って行く。

胸に殉職された方の遺骨を抱いて悲しい顔一つなさらず、「男なら」「同期のさくら」のうたをうたつてゐらっしゃる。今朝に限ってどのうたもどのうたも悲壯にきこえてならない。白鉢巻に白きマフラー、り、しい姿のお兄様方が戦闘指揮所に並んでゐらっしゃる。みんな同じ服装で暗くてよくわからない。自分達の受持ちの方々を探してゐると本島さんひよっこり「お早う」と声をかけられる。「六十九振武隊集合」と本島さん。



皆集まられて最後の話にふけることしばし。本島さんは隊長さんに載（戴）いた菊水の鉢巻をし、渡井さん、堀井さん「たすき」をしていらつしやる。散りかけた八重桜を差上げると大へんよろこばれた。二つのマスコットのうち一つを愛機に、一つを飛行時計へぶらさげられたとのこと。自動車で出発線のところまで行かれる。渡辺さん見えなくなるまでハンカチを振られる。滑走を始めた飛行機が次々と離陸する。東の空が少し白みかける頃だった。薄暗い中にも少しはつきりと「もとしま」と書いた飛行機が飛び立つ。ア、本島さんだ・・・と思ふとすぐ「わたぬ」、堀井機が飛ぶ。三機編隊を組んで飛んで行く。堀井機が物すごく低空を飛ぶ。思わず冷汗が出る。最後までお送りして兵舎へかへる。しかし何時までも何時までもぼんやりと考へ込む。日の出と共に最後の基地を飛び去って征かれた神鷲の御成功を祈りながら。今朝の感激を語っていると山下少尉一人かへっていらつしやる。「すみませんでした」と紙片を渡される。五名（渡辺、堀井、渡井、中山、山下）の名前が記されてある。これだけ五名征かれなかったんだ。そうすると征かれた方は本島さんと・・・河村さん・・・二人丈、どんなことがあっても今日は征くと言つて張切つていらつしやった御二人。午前九時半、本島、河村さん無事体当りなされた頃、南へ向かつて黙たふを捧ぐ。今でも元氣な聲で「空から轟沈」を唄ふ本島さんの聲がきこえる様だ。



「四月十七日」

敵襲で待避壕に待避する。三十一武陽（揚）隊のハセベリさんが御飯もたべずに逃げ込んでくる。

皆から弱虫だと言はれて、ぷいと壕を飛び出して行

ったが又 待避、待避で一生懸命御飯を口に入れたままで

は入ってくる。渡井さん「坊や又きたのか。御飯だけはゆっくり

食べろよ」と言はれて出て居（行）ったが、敵機の爆音をきいて

又走り込んでくる。やっと三回目で食べをへたとのこと。

ほんとうに呆れてしまった。優しく女性見（み）たいで「坊ちゃん」で育ったと言ふ渡辺さん、一度も待避なさらなかった。

堀井さん一度爆撃されて命拾ひしたから出撃までは

大事な体故と通過しをへるまで待避してゐらつしやった。

壕の中でも一人ではしゃいで慰問團がきて踊ったと言

ふ「花は霧島・・・」を踊られる。手ぶり身ぶりの上手なこ

と。思わず先生方と吹き出す。二〇振武隊のゐた兵舎

に寝ころんでゐると赤崎さんが「出撃だつてよ」と這入つ

てくる。びっくりして飛び起きて行くと渡井さんが「早く

死んだ方が幸福だよ。俺達の様な死にそこなひは苦勞

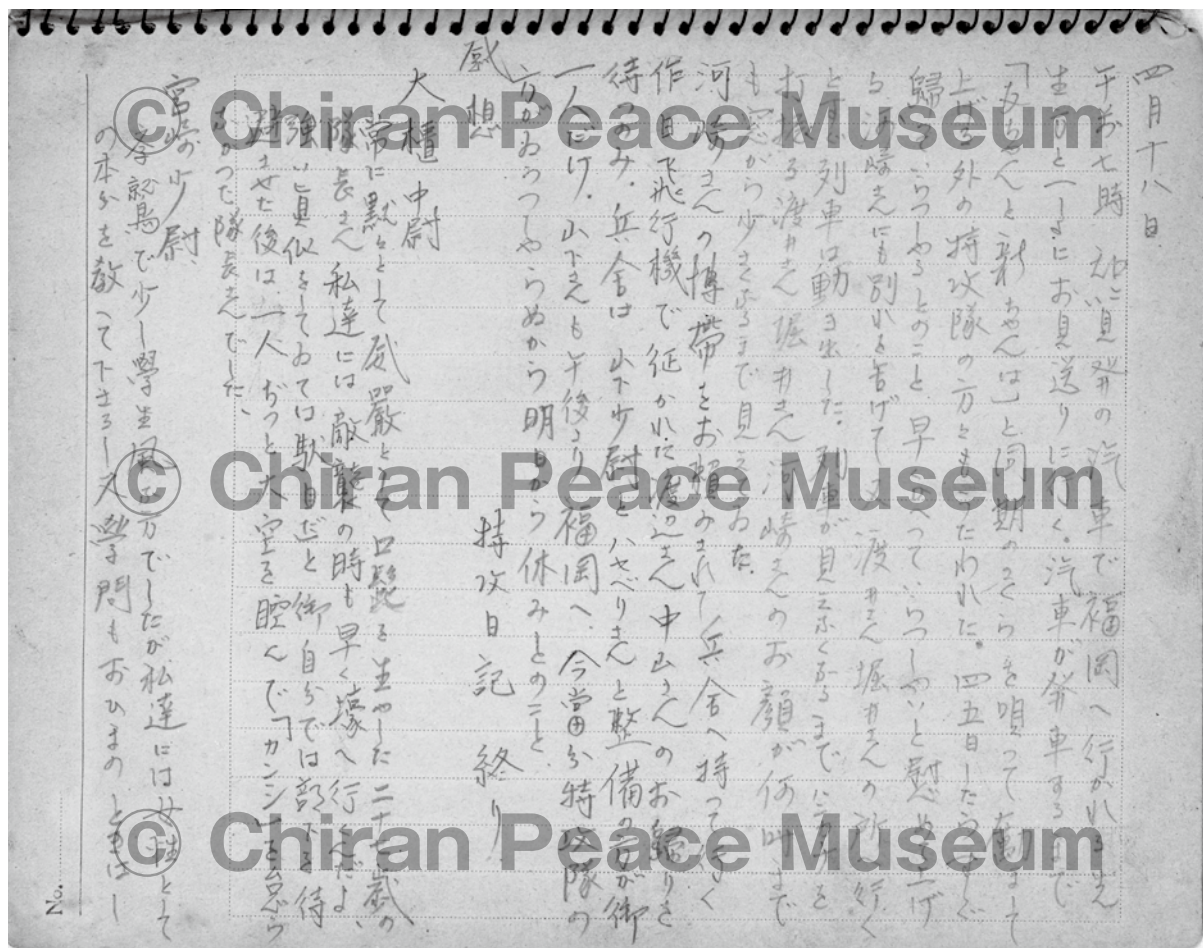
するよ。福岡辺まで行かねばならぬからね」とのこと。

近頃少し顔色もよくなった河崎さん、まだ目は黄色く

してだるそうにしてくる。「河崎さんも行くの」ときくと

「うゝん」と言つてゐる。ほんとうに特別攻撃隊の御苦勞が察せられた。夜先生の家へ渡井さん、堀

井さん、河崎さん達と一しよに行く。トランプ等してたのしむ。



「四月十八日」

午前七時、知覧発の汽車で福岡へ行かれる。先

生方と一しよにお見送りに行く。汽車が発車するまで

「友ちゃんと新ちゃんは」と同期のさくらを唄って勵まして

上げる。外（他）の特攻隊の方々もうたわれた。四、五日したらすぐ

歸つていらつしやるとのこと、早くかへつていらつしやいと慰めて上げ

る。河崎さんにも別れを告げて又、渡井さん、堀井さんの所へ行く

とすぐ列車は動き出した。列車が見えなくなるまでハンカチを

打振る。渡井さん、堀井さん、河崎さんのお顔が何時まで

も窓から小さくなるまで見えてゐた。

河崎さんの博（縛）帯をお頼みされて兵舎へ持つていく。

作（昨）日飛行機で征かれた渡辺さん、中山さんのお歸りを

待つのみ。兵舎は山下少尉とハセベリさんと整備の方が御

一人だけ、山下さんも午後より福岡へ。今當分特攻隊の

方がいらつしやらぬから明日から休みとのこと。

特攻日記 終り

感想

大櫃中尉

常に黙々として威嚴として口髭を生やした二十七歳の

隊長さん。私達には敵襲の時も「早く壕へ行くんだよ、

強い真似をしてゐては駄目だ」と御自分では部下を待

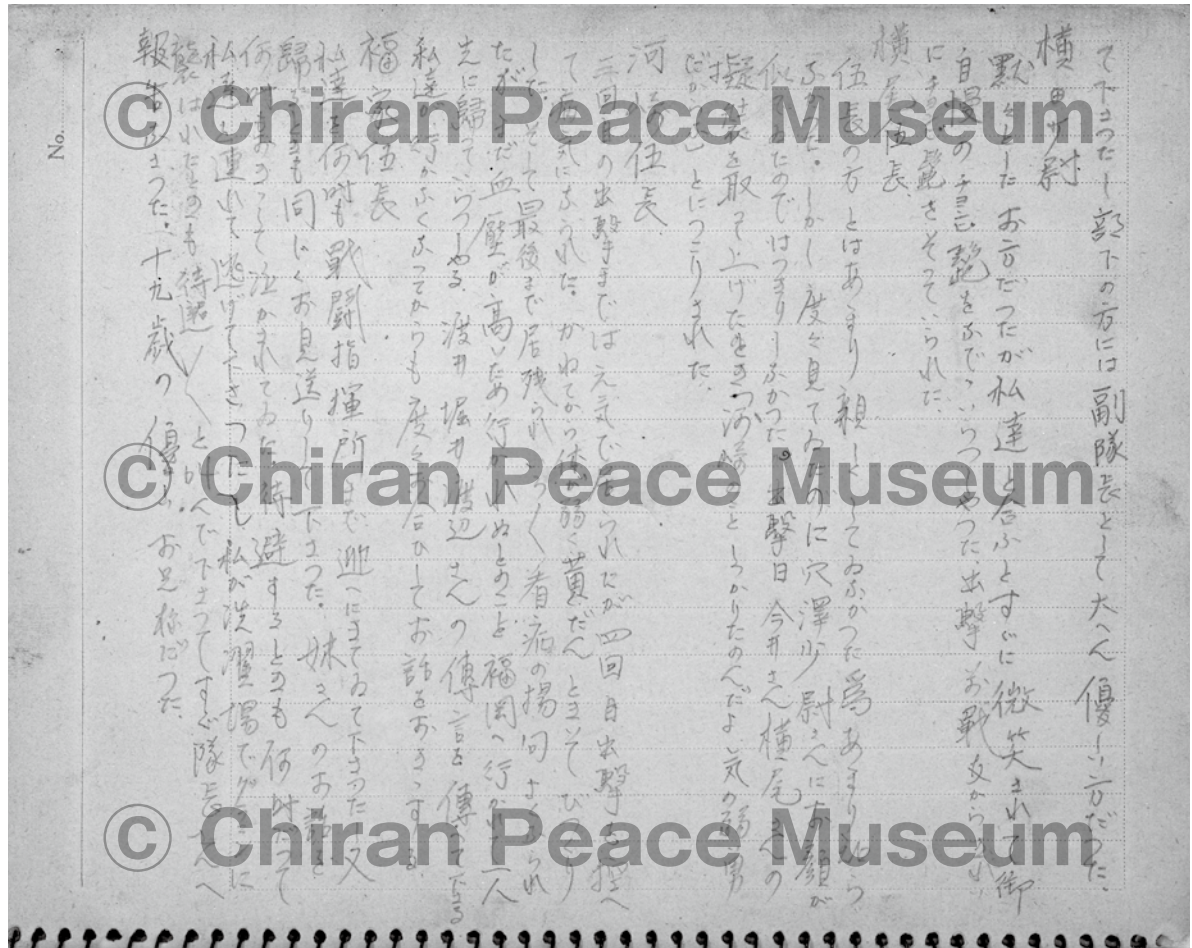
避させた後は一人ぢつと大空を睨んで「カンシ」を怠ら

なかつた隊長さんでした。

宮崎少尉

李驚で少し學生風な方でしたが、私達には女性として

の本分を教へて下さるし、又學問もおひまのときはし



て下さったし部下の方には副隊長として大へん優しい方だった。

横田少尉

黙々としたお方だったが、私達と合（会）ふとすぐに微笑されて御自慢のチヨビ髭をなで、いらっしゃった。出撃前、戦友からきれいにチヨビ髭をそっていられた。

横尾伍長

伍長の方とはあまり親しくしてゐなかった為あまり知ら

なかった。しかし度々見てゐたのに、穴澤少尉さんにお顔が似てゐたのではっきりしなかった。出撃日、今井さん、横尾さんの擬装を取って上げたとき「河崎のことしつかりたのんだよ。気の弱い男だからな」とにつこりされた。

河崎伍長

三回目の出撃までは元気で居られたが、四回目出撃を控へて病氣になられた。かねてから体が弱く、黄だんときいてびっくりした。そして最後まで居残られ、いろいろ看病の揚句よくなれたが、まだ血圧が高いため行かれぬとのこと。福岡へ行かれて一人先に歸っていらっしゃる。渡井、堀井、渡辺さんの傳言を傳へて下さる。私達が行かなくなつてからも度々お合ひしてお話をおき、する。

福家兵長

私達を何時も戦闘指揮所まで迎へにきてゐて下さったし又歸るときも同じくお見送りして下さった。妹さんのお話を何時もおき、して泣かされてゐた。待避するときも何時だって私達を連れて逃げて下さったし、私が洗濯場でグラマンに襲はれたときも、待避待避と叫んで下さって、すぐ隊長さんへ報告なさった。十九歳の優しいお兄様だった。



岩間兵長

何時もしつかりして十九歳とも思へぬ軍人らしい方だった。しつかりした中にも無邪気さがあり、おさるさん見たいに木のちよっぺんへのぼられて木の上に寝られたり、皆んなで話してゐる所をかきまぜて笑はしたり朗らかでした。

後藤兵長

同じ十九歳のお方で、始めの中はよく無邪気に話していらつしやつたが一度出撃しそこねてから口をきかれず何時も口惜しそうな顔をしていらつしやつた。出撃しそこねた日、私達と同じ位の高さなので航空服姿の後藤さん、ちよこちよこして桃太郎さんみたいだと言つてゐた。

池田兵長

父親なく少々淋しい方だった。徳之島まで一人行かれて再び知覧へかへつていらつしやつた。

四月十五日、隊長様残して出撃（徳之島より）体当り。

今井兵長

一番年若く十八才の無邪気な方でした。

私達より二つしか違はぬお兄様、恥づかしして一人ではあまりお話しなさらず。然し福家兵長様と仲がよく度々お話しする。出撃当日、擬装とつて上げる。

「こんなにお手々きたなくなるよ」と言はれたけど無理にお願いひする。若くして純心な今井兵長様、四月十五日を最後として散つて行かれた。御両親の心如何ばかりと思ふ。

佐々木兵長

何時もこつけないな十九才の若いお兄様ー。

思ひ出のうたは、明日はお立ちか？何時も何時もしばぶえにてうたつていらつしやたあのうた。



形見

池田少尉（石けん、トランプ）
 本島少尉（マフラー、万年筆、鏡、点数、写真、名札）
 福家伍長（万年筆）
 今井兵長（名札）
 岡安少尉（階級章）
 岩間兵長（書置）

二．聞き取り調査

特攻日記を理解するには文面を熟読し関連資料との照合が必要だが、それには限界がある。その実情を一番よく知るのはやはり筆者である。

日記を書かれた永崎 笙子氏（旧姓：前田）に直接お話を伺う機会があり、幼少期の思い出、知覧教育隊の飛行兵との交流、戦時中の日常生活、そして三角兵舎での奉仕作業の様子などをおよそ五時間にもわたってお聞きした。

戦後六十三年が経過してからの聞き取り調査だったが、日記についての具体的なお話、本人にとっては当たり前で日記に書かれなかったことなどを伺うことが出来た。

本項では、奉仕作業の実情を紹介するため該当箇所を抜き出して紹介する。



永崎 笙子（旧姓：前田）

生年月日：昭和4年9月15日
(1929)
出身：鹿児島県南九州市
知覧町郡
聞き手：八巻 聡
聞き日：平成20年6月2日
(2008年)
場所：永崎氏宅
(埼玉県さいたま市)

八巻 「昭和二十年三月末頃から知覧飛行場に行かれたとのことですが、どういう経緯で行くようになったのでしょうか？」

永崎氏 「これはね、急な指示でして、三月二十七日から行っただけですが、私達はそれまでは風部隊（第3陸軍気象隊 風第1

9568）っていう部隊の洞窟を掘っていたんですね。

これは切り込み隊の食料を貯蔵する大きな洞窟で、女学校の横に二つ掘っており、それを毎日当番兵が来て、巻尺で計ってこっちは何メートル掘ったとか確認していました。

町内の民家に宿泊していましたから毎朝そこへ行って、『今日の作業はどうやればいいですか？』と指示を仰ぎ、今日は何メートル掘るとか、そういったノルマみたいなのがありまして、かなり大きな洞窟を掘っていました。

その日も作業場で現場に行きましたら、帖佐先生か岩脇先生のどちらかが急に『みなさん、今日は、これから特攻隊の給仕に行きます』とおっしゃったんです。」

八巻 「前触れはなかったんですか？」

永崎氏 「前触れはなかったんです。それで、作業着のまま来てましたので、『皆さん、これから一旦自宅に戻って、制服に着替えてまたここに集合して下さい』って言われたんです。」

八巻 「では、作業着のままではなくて、制服に着替えて。」

永崎氏 「はい。それで、家へ帰って、襟カバーのついた上着、下はもんぺです。私はもうそのままで行きましたけど。」

上だけ制服にして、名札をつけて、校章をつけて、防空頭巾を斜めにぶらさげて、木口の手提げにお弁当を入れて集まりました。そして飛行場まで徒歩で行きました。」

八巻 「その時は、知覧飛行場に特攻隊が来ているということを知っていたのでしょうか？」

永崎氏 「その時まで全然知りませんでした。でも、先生は、特攻隊とおっしゃいました。」

八巻 「飛行場に行くことになったのは、四月で三年生になる全員が行くことになったのでしょうか？」

永崎氏「いえ。最初は十八名です。町近辺に住んで、商家とか、農業をたくさんやっていない家の人たちといえますかね。」

八巻「では、同級生でも、実家が農家であれば畑仕事の方を優先して手伝っていたと。それは一組、二組関係無しに?」

永崎氏「関係なくって、その風部隊の壕堀に来ていた人たち全員ですよね。」

八巻「一番初めに行く時は引率の先生が付いて行かれたのでしょうか?」

永崎氏「はい、そうです。二名（岩脇 ヨシ子、帖佐 潤子）一緒に行きました。二名と役場の学務課長さんです。」

八巻「一番初めは三角兵舎のところに行かれて、それからどういうことをされたのでしょうか?」

永崎氏「特攻隊の方に九名、戦隊っていう護衛機の方に九名と分かれたんですよ。そこで、私は特攻隊の係でしたので、最初、兵舎の布団作りをしました。もう、一人ひとりのベッドは出来ており、麦わら布団か何か入ってましたのでそれに毛布を三枚、通路の方を頭にしまして、壁側から引っ張って、下をくるんで、寝袋みたいにして頭側からパツと入れるようにしました。」

八巻「人がすぐ入れるような状態にしたんですね。」

永崎氏「当番兵が一人いて毛布を三枚、二人で引っ張って、こうやって下さいつて教えてくれたんですよ。それでもう、一日が終わりました。」

八巻「それは何棟も担当されたのでしょうか?」

永崎氏「いえ、一棟だけです。」

八巻「では、九名でその一棟を担当されるような形だったのでしょうか?」

永崎氏「はい、そうです。次の日が、やっぱり特攻隊の方々がいらっしゃる兵舎へ案内されたんですけども、みんな恥ずかしくって、顔出さなくて一日が終わっちゃったんです。」

八巻「その日はどこに居たのでしょうか?」

永崎氏「原っぱかどこかで、みんな固まって時間を潰していたんだと思います。」

先生の指示があつて。特攻隊の方々がいらっしゃる兵舎へって言われたんですが、みんな入れなくって、一日終わっちゃったんです。」

八巻「やっぱり、恥ずかしくてですかね。」

永崎氏「そうです。なんて声をかけていいのか分かりませんし、まづ言葉が出来ませんし。」

八巻「純情というか、恥ずかしさがあつたんですね。」

永崎氏「本当に田舎の勉強しない女学生で。世間知らずって言いますよ。だからそのままで一日が終わっちゃって。三日目からは本当に特攻隊の方がいらっしゃるその指示された兵舎へ伺って、洗濯物を預かって作業をしたんですよ。」

八巻「初めに、第三十振武隊を任せられますが九名とも第三十振武隊を担当されたのでしょうか?それともさらに班分けされ、何人かは他の特攻隊に回されたのでしょうか?」

永崎氏「最初は全員で。」

八巻「初めて特攻隊員と接してみて、どういう感じだったのでしょうか? 知覧教育隊の飛行兵のような感じだったのか、または、独特の雰囲気があったのか。」

永崎氏「いえ、全然、少年飛行兵の方々よりもちょっと年齢が上かなって感じでしたけど、本当に少年っぽい、みなさんでしたね。もっとも少尉さんとかそういう方は、シャン

としてらっしゃいましたけど、後はみんな少年飛行兵の方が多かったものですから、本当に朗らかで、集団で歩いてらっしゃると賑やかでしたよね。」

八巻 「悲壮感が漂い、青くなつてはいなかったのでしょうか？」

永崎氏 「いえ、そういったものは何にもおありでなくって。もつとも三十振武隊は、もう一回徳之島に前進して、給油してから沖縄に行きますのでそういったこともあったのかは分かりませんが、本当に普段とお変わりなくって、すごく笑わせたり、人が集まっているとそこに混ざってお話をしたりして、普段と全然お変わりなかったです。」

八巻 「三角兵舎に何回も通われていますが、たとえばそれを示すものは何かあったのでしょうか？ 勤労奉仕である腕章をつけるとか、敷地内に入る前に身分証明書を提示したとか。」

永崎氏 「何にもないです。ただ、ネームだけは全員付けていました。これは女学校が用意したもので、この前から付けていたんですよね。エナメルでみんな名前書いてありました。生物の米山先生が全員の名前を書いて下さって、みな付けていたんです。」

八巻 「女学校の制服でしたら、一目で他の人も分かりますからね。」

永崎氏 「はい、そうですね。」

八巻 「三角兵舎地区は、一般の人は立ち入り禁止なんですよ。」

永崎氏 「立ち入り禁止で、一般の人が入って来れたのは慰問に見えた時だけですよ。慰問はね、婦人会の人が見えました。お重箱とかいっぱい持って校長先生の奥さんも見えてました。」

八巻 「特攻隊員をもてなしたんですね。それと、永崎さんの日記によると、慰問団が来ていたみたいですが？」

永崎氏 「あれは月見亭の蔵元 秀美さんが主催して高晴会がやったんです。高晴会とは高田 晴雄さんという方の踊りの本部が鹿児島にあつて、その支部が知覧にもあったんです。高晴会知覧支部っていうところですよ。あそこでタップダンス、日本舞踊、いろんな踊りがありまして、教えていらしたんです。その人たちが慰問団として四月十日ですかね、霜出小学校でやりました。」

八巻 「地元の劇団だったんですね。」

永崎氏 「はい、地元の劇団です。みんな自宅からお化粧してタオルや手ぬぐいなどを被って、トラックに乗っていらしたんですよ。本格的な舞踊で、日本舞踊なんかも、すごく本格的ですから。」

今も思うんですけど、春の仔馬って言うひらひらしたタップダンスを小さい子供たちがやってましたね。それから、鳥濱 礼子さんも踊られたんですよ。」

八巻 「そういう踊りをする時は、ステージか何かあったのでしょうか？ それとも、どこかの広場でやったのでしょうか？」

永崎氏 「ありましたよ。霜出小学校の講堂は一段高いところに台がありましたので、そこでされて、一般の人は、全員後ろで立って見たんですよ。だから、講堂が一杯だったと思います。」

八巻 「では、霜出小学校の講堂でやって、そこに隊員たちがみんな集まったと。」

永崎氏 「みんな兵舎から歩いていらっしゃったんですよ。」

八巻 「霜出でしたら近いですからね。」

永崎氏 「もっとも私たちもその踊り子さんたちのトラックに乗せていただいて、一緒に行きましたけどね。それで、出し物を

三つくらい見て、隊員の方はもう外出されるので全員兵舎へ帰られました。他の方々は見えてらっしゃいましたけど、私たちは全員でまた兵舎に帰りました。

その日も午後五時半に兵舎の前からトラックが出ましたのでそれに乗って町に外出されました。」

八巻

「永崎さんが三角兵舎に勤務される時は、集合時間や解散時間は決まっていたのでしょうか？何時にここに集まりなさいとかですね。作業は一応何時までとかですね。」

永崎氏「行きは空襲があつて、犠牲者がたくさん出るといけないので、二人か三人ずつバラバラに行つて下さいと言われてました。だから私はいつも富屋食堂へ寄つて、鳥濱 礼子さんと二人で行つてまして、下郡の下の方を通つて、上別府の方を曲がつて、歩いて一時間ぐらいかつたでしょうかね。下駄で、でこぼこの砂利道を歩くのでそれくらいかかったと思うんですが、帰りも歩きだったんですね、一週間くらいは歩きだったと思います。下郡の南の方で、私の下駄が割れちゃつて、一方の下駄をぶら下げて帰った記憶があります。」

それで、一週間くらいしたら、夕方はトラックで、外出される特攻隊の方と一緒に兵舎の前から乗せていただきました。午後五時半に兵舎の前からトラックが出ますので、帰りはそれに乗せていただいて、永久橋の先の警察署に近いほう、あの辺で全員降りました。それで特攻隊の方は、永久旅館とか、内村旅館とかに泊まりました。

私たちが唯一トラックに乗つて行ったのは、四月十六日の第三次総攻撃の日です。午前四時半頃、内村旅館の前にトラックが止まってましたよね。その日は早かったですから、

それに乗つて、泊まれた特攻隊の方々と一緒に飛行場に行きました。遺骨をぶら下げた方もいらつしゃつて、トラックに乗り込む時にはやつぱりお辞儀をしましたよね。私たちが行く時に乗せていただいたのはそれだけでした。」

八巻

「一番初めは、特攻隊九名、戦隊九名でしたよね。最終的には、何名くらいに増えたのでしょうか？」

永崎氏

「校長先生のお手紙や記録、郷土史に記録されているのは、約百名って書いてありますよね。三年生、百名、特攻兵舎勤務と（その当時、三年生は百十三名在籍）。私が校長先生に問い合わせたのもそうでしたね。」

八巻

「では、相当な人数に増えたんですね。初め十八名でしたが、それほど人手が必要になったんですね。」

永崎氏

「隊員の方々も沢山いらつしゃいましたし、特攻兵舎も私たちは下の方（南側）でしたけれども、今、特攻兵舎跡つて記念碑が立っている方は当時警備中隊つて言っていました、あちらの方にも兵舎があり、同じ兵舎の担当だった者は途中から私たちと別れて向こうへ回されていきました。」

八巻

「当時はどういふものを持って、三角兵舎に行かれたのでしょうか？」

永崎氏

「今でもありますが木口つて言つて、木の枠があつて、そこに取っ手があつて、袋を縫いつけて、それをぶら下げて行きました（木口の手提げバッグ）。それにはハンカチと弁当、大豆を炒つたのを持っていきましたね。」

八巻

「お弁当は自分用でしょうか？」

永崎氏

「自分用です。それで、たまにフライパンで大豆を炒つて、お砂糖なんかないですから、塩をパツとかけて、それを新聞紙に包んで、休憩の時はそれをポリポリと食べていまし

た。だから、お弁当以外は何も入ってなかったですよね。」

八巻 「三角兵舎に行く時はどのようなお気持ちだったのでしょうか？重い気持ちで行ったのか、それとも何か手伝えることはしなきゃいけない、という責任感で行かれたのか。永崎さんが行かれる時はどのようなお気持ちだったのでしょうか？」

永崎氏 「やっぱりね、責任感みたいなのがありましたよね。特攻隊の方はみんな行ったら帰ってらっしゃらないですよ、だから、そういった気持ちの上で、本当に辛くて悲しいんですけど、でも、次にいらした部隊の方々のお世話がありますので、みんな一生懸命だったと思います。」

八巻 「辛い仕事ですね。気が滅入ったりはしなかったでしょう？ガクツと気落ちするとも言うんでしょうか。」

永崎氏 「二人くらいになった時には、泣いたりしましたけど。私は前田 要子（旧姓・森）さんと仲が良かったものですから、出撃されてからすぐでしたかね・・・、彼女と土手の上でシクシク泣いてたら当番兵が女学生はお腹が空いたらしいって、麦飯の大きなおむすびを一つずつと、大きなヤカンを持ってきたんですよ。伊藤上等兵ということ覚えてますけど、女学生はお腹がすいて泣いてるらしいって言って、忘れないですけどね、優しい人がいらして。麦飯はポロポロするの、だから普通の兵隊さんはこういうのを召し上がっていらっしゃったんでしょうね。」

八巻 「自分のを分けてくれたのかもしれないですね。」

永崎氏 「でこぼした大きなヤカンに、お湯だか水だかを一杯入れて、それをドンと置いて下さって、これを食べなさいっておむすびをくれましたけど私たちは気持ちの上では特攻隊

は帰ってらっしゃらないので泣いてたのに、やさしくしてくださったので、それを頂きながらまたポロポロと泣いてましたけど、そういうこともありましたですね。」

八巻 「三角兵舎で色んなお手伝いをされていますよね。業務量はいかがだったでしょうか？忙しくて手一杯だったのか、それとも余裕もあったのか？」

永崎氏 「午前中は忙しかったですね。やっぱり全部開け放して、最初に兵舎の掃除をやって、今度は洗濯物を預かって、さらに三十振武隊みたいに、しらみがいる部隊は、牛や馬の餌を煮る五右衛門風呂をちよつとひしゃげたみたいな釜がありますのでそれに水を張って洗濯物を全部入れて、下から燃しちゃうんです。」

熱湯になるとしらみは白く浮いちゃいますのでそれを全部すくい上げて、洗濯場へ抱えてそこで洗って、手絞りですから、一日では乾きませんので、紐にかけて乾かしました。それでも、空襲警報が鳴ると、その火をバツと消しちゃうんですよ。次に焚き付ける時にすっごく時間がかかって大変でしたね。」

八巻 「永崎さん達なしこ隊の方々は特攻隊員のお世話をしますが、特攻隊員達のことをどう思っていたのでしょうか？勇敢な立派な人達だと思っていたのか、それともあと数日後には戦死をされるわけですから可哀想な人達だと思っていたのか、どのように思っていたのでしょうか？」

永崎氏 「当時は三月二十七日の段階で私共もここは戦場だと思いましたが、近いうちに特攻隊の方々はお国のために敵艦を轟沈させるために出撃なされるけど、いずれ私たちもこの地で果ててしまうんだという思いの方が強かったです。」

やはり気持ちの上では自分たちも死ぬ、そういう気持ちを持たなきゃと思っていましたので特攻隊員とも同じような気持ちだったと思います。いずれはこの地も戦場になって誰一人いなくなるほど爆撃に曝されて、みんなこの地で終わるんじゃないだろうかというような思いは、してましたよね……」。

八巻

「お世話をする方もそのような心意気だったんですね……。女性でも、戦友のような感じで、特攻隊はもちろん数日後に爆弾を抱いて亡くなりますが、自分たちもいつかはわからないけどいずれ死ぬんだと。」

永崎氏

「そうです、それは思いましたよ。皆そういう話をしていましたので。特攻隊とは年齢も違いますが、私たちは私たちが幼いながら、そのような思いを持って奉仕に行っていたと思います。」

八巻

「悲しくなって厭戦気分になるようなことはなかったのでしょうか？」

永崎氏

「そういうのは全然なかったです。普通の兵隊とも接する機会がありましたけど、そういった厭戦気分というのは全然ありませんでしたね。」

八巻

「なでしこ隊の方々が特攻機を見送っている写真（昭和二十年四月十二日、戦闘指揮所前で撮影）がありますが、出撃があるたびにこのように見送っていたのでしょうか？」

永崎氏

「いいえ、このような形で見送ったのはこの日だけです。四月十六日も見送りましたが、その時は飛行学校の格納庫の前からで、特攻機はそこから霜出小学校の方へ飛んで行きました。」

見送っている写真は出発線に行くところですよ。穴澤機

が行かれますので、四月十二日の第二次総攻撃です。穴澤さんが一番最後でした。

前の飛行機は桜をすっごく、操縦席の中を桜で一杯にして、全部桜で埋めた飛行機だったんですよ。」

八巻

「その特攻隊員の方が、そうされたのでしょうか？」

永崎氏

「乗っている方が自分で桜を挿されたのですが、それがね、お顔がわかんないぐらいに桜で一杯にしていたんですよ。穴澤さんは太さ四センチぐらいの鉢巻をされていたんですよ。見送ってるなでしこ隊の方々のお名前は全部わかっています。」

八巻

「この日だけは見送りをするように言われて行かれたのでしょうか？」

永崎氏

「特別言われたような気もしないんですけど、私は兵舎の前から誘導路に行く特攻隊と同じトラックで行って、隊長機が一番手前にありましたので、そこで先生方と私共も降りたんですよ。穴澤機なんかはその奥の方に置いてあったと思うんですよ。」

八巻

「下ろされた場所では、特攻機はまだ掩体壕の中に入っていたのでしょうか？」

永崎氏

「掩体壕じゃなくて地べたでしたよ。周囲は少し木があるところでしたが土の上にむき出しで二機あって、それは九七戦でしたが、一番手前が隊長機だったので、そこで先生方と皆で降りたんです。奥まで行った人はいないと思います。最初、隊長機の擬装を取って、続いて本島機と二機分の擬装を取って、それから隊長さんが手を上げて始動車を止めてくださいましたので、『この始動車に乗って戦闘指揮所まで行きなさい』と言われましたから、それに乗って行き

ました。それで、戦闘指揮所前に並んだわけです。」

八巻 「皆さんが見送りに持つてる桜は、どこから持って来たのでしょうか？」

永崎氏 「この桜、私は自宅からです。家には八重桜の木が二本あったんです。あまり大きくなかったんですが、祖父は塩釜桜と言っていましたよね。その桜の木から朝、枝を折ったんですがもうこれはかなり散ってたんですよ、散り始めてました。」

八巻 「この日だけ、桜の枝を持って行くように指示されていたのでしょうか？」

永崎氏 「いいえ、たまたま私は自分で持って行きました。指示はなかったです。」

八巻 「見送りの時は、どのような気持ちで見送られたのでしょうか？」

永崎氏 「私は特攻機に付いている爆弾が怖かったです。普段は積んでいませんので、実際付いてるのを見て足がガタ・ガタ・ガタ・ガタとずっと震えて、震えてもう正視出来ない感じでした。その怖い思いと、何か色んな思いがありました。が、もう最後のお別れで出発線に向かう所ですし、辛い気持ちとお顔を知っていましたので。

でも、本当に一番最初に爆弾に目がつきました。ウワー、爆弾を積んでらっしゃる、と思ってもう本当に足の震えが止まらなかったです。」

八巻 「永崎さんの日記には、この写真を撮られたことについて書かれています。報道関係者か軍のカメラマンがいたのでしょうか？」

永崎氏 「すぐ後ろにいました。新聞記者だったみたいですよ。日

記には映画のおじさんと書いていますが、その時はそう感じたんでしょうね。」

八巻 「永崎さんは特攻隊とのことを日記に記録されていますが、日記をつけるのは毎日の習慣だったのでしょうか？」

永崎氏 「習慣ではなかったです。一番最初、私はやっぱり皆様方のことは絶対に忘れまいと思ひまして、自分のために書き留めておきたいと思って、家にあつた家計簿を、祖父が家計簿をつけてノートには三ページほど鉛筆で米一俵いくらだとか書いてあつたんですが、それを破いて使い始めたんです。当時は紙がなかったですし、ノートは売っていませんので家にあつたものに書き留めました。それで、はじめは三日遡って書いたんです。」

八巻 「では二十七日からつけたんじゃないやなくて三十日から遡って記録し、日記に残すことにしたんですね。」

永崎氏 「特攻隊の方とお会いしたのが三日目からですから、書き留めたいと思って、皆様方の事は絶対忘れないと思って、だから三日遡のぼって書きましたね。」

(注：日記の書き始めは、三日遡ると三十日から、特攻隊員と会った日からすると二十九日となり、一日の差が生じる。)

八巻 「特攻隊との交流が強烈な印象だったので、それをなんとかしても忘れてはいけないとの思いで日記をつけられたんですか・・・。」

永崎氏 「そうなんです。どうしても書き留めて、自分が忘れないためにお名前とか住所とか、だから汚い字で一杯書き留めてありますけど、この日記が表に出るとは思っていませんでしたので、本当に自分の思いのままを書きとめたんです。勉強もしない田舎の女学生が書き留めたのでお恥ずかしい

ですけどね。」

八巻 「それで、これを書かれたのはその日の奉仕が終わり、夜、

家に戻られてから書かれたのでしょうか？」

永崎氏 「兵舎で書いたのがほとんどです。」

八巻 「それでは、勤務をされている最中に書かれたんですか？」

永崎氏 「はい、そうです。家には六畳の和室に机があつて私の部屋があつたんですが、北向きでちよつと寒いし暗かつたんですよね。だから、家で書いた部分もありますが、ほとんどは兵舎で書きました。」

昼の空いた時間があるんですよ、ちよつどお昼を特攻隊員に差し上げて、後片付けをしますと、お洗濯物が乾く時間があつて、その間が二時間ぐらい空きました、その時、食堂で書きました。」

八巻 「食堂があつたんですか？それとも三角兵舎の中ででしょうか？」

永崎氏 「特攻隊の方が召し上がる食堂がありまして、それは地上に出た建物でしたので窓があつて明るいですよね。机もありますし、椅子もありましたので皆もそこで休んだりしていました。」

八巻 「それとですね、特攻隊員から遺書やお手紙を預かったことはあつたのでしょうか？」

永崎氏 「はい、手紙を預かりました。岡安少尉のお手紙を四通預かりました。」

八巻 「それを、どこから送つたのでしょうか？ポストだったのか、それとも郵便局の窓口から発送されたのか。」

永崎氏 「昔は役場の横に郵便局がありましたのでそのポストに投函しました。」

八巻 「お手紙を預かることになったのは、特攻隊員の方からお願いされたからでしょうか？」

永崎氏 「隊員の方から預かり、発信元は私の住所にしました。軍を通すと検閲があるので、あなたの住所をお借りして出して欲しいとおっしゃったので。」

八巻 「やはり、特攻隊員のお手紙を預かつて出していることを憲兵などに知られたら、怒られるようなことなんですか？」

永崎氏 「それは、没収された上に、問題になって、きっと罰を受けたんでしょうね。」

八巻 「永崎さんご自身は預かつて、こっそり出しているところを見つかったりはされなかったのでしょうか？」

永崎氏 「全然見つかりませんでした。木口（手提げバッグ）の一番底の見えないところに入れて、すぐトラックに乗り込みましたので、憲兵とも会うこともありませんでしたし、軍の検閲を受けるような場所ありませんでしたので。」

八巻 「では、特攻隊員のお世話をする時の兵舎地区への出入り時、荷物検査などはなかったのでしょうか？」

永崎氏 「私たちはそういうのはありませんでしたね。」

八巻 「それからしばらくすると、特攻隊員のお世話も中止になりましたが、なぜ中止になったのでしょうか？」

永崎氏 「空襲が激しくなったことがありましてね、百三戦隊に片山中尉（飛行第百三戦隊片山千彰中尉）という方がいらっしやつたんですが、その方が女学生をこんなところに置いたのでは危険だからと上司の東条少佐（飛行第百三戦隊長東条道明少佐）に具申なさつて中止になったんです。これは鳥浜礼子さんから聞きました。」

戦後、片山中尉と東京の慰霊祭で何度かお会いしましたけど、東条少佐ともお会いしてお食事をしたんですね、片山中尉がそういったことを具申されて、それが上層部に届いて、中止になったということを知りました。」

八巻 「奉仕が中止になって永崎さんはどのようなお気持ちだったのでしょうか？奉仕から解放されてホッとしたのか、それとも特攻隊員が知覧にいる限りはお世話を続けたかったのか？」

永崎氏 「辛い思いでしたし、十六日の出撃を見送り十八日には知覧駅から皆さんをお見送りしましたので。もう、最初は風部隊の仕事の方が辛かったもんですから。穴掘りがすつごく辛かったんですね。」

八巻 「体力的に言うことでしょうか？」

永崎氏 「体力的にです。そして当番兵が何メートル掘ったとか、測りに来るでしょ、そういうのが厳しかったんだけど、特攻兵舎の方がうんと精神的に辛かったです。」

みんな本当に日々辛い思いをして、それでも一生懸命、奉仕をして私たちに与えられた仕事とって一生懸命やっただと思います。」

八巻 「日記には軍歌のお話が出てきますが、隊員同士励ましあうためによく歌われていたのでしょうか？」

永崎氏 「一番、軍歌を歌った場面というのは、出撃の日に誘導路まで行くためにトラック、当時は貨物と言っていました。それがそれに乗ってもみんな言葉がないんですね。だから誰かが軍歌を歌い始めて誘導路を移動している最中、特攻機の置いてあるところに到着するまで、空から轟沈を歌ったりしました。」

言葉が何も出ませんし、どうお声をかけていいのかもわからず、みな辛い思いばかりで、だからそれで誰かが軍歌を歌い始めて、軍歌を歌いながら特攻機のところまで行きましたよね。普段軍歌はそうは歌ってなくて、陸軍空の特攻隊か何かを一人の隊員の方から教えて頂きましたし、みなそれぞれにそういった形で覚えていったようです。各隊の歌も、その部隊の一人から聞いて、書き留めたり、歌ったりして、個人的に教えてもらいました。

全体で歌われたのは四月十六日です。午前四時半～五時近く、霧で何も見えなかったんですがその中で、男ならを歌ってらっしゃいましたよね。一つの部隊だと思うんですが、何にも、とにかくあの大地が霧で見えなかったんですね、その中を男ならの軍歌だけが聞こえてましたよね。そして一番最後、『ワアーツ』と皆さんで掛け声かけられて、きつと、あれは自分たちの特攻機の置いてあるところに駆け出して行ったんじゃないかと思っています。私たちの隊の方は皆さんトラックで出発線まで行きましたので、とにかくちょっと先も見えなかったですね。」

八巻 「知覧は霧が出やすいところですからね。それと、軍歌は声がかけれないから会話の代わりだったんですね。」

永崎氏 「私はそう思います。」

八巻 「(書籍『特攻のまち・知覧』を見ながら) 長谷部さんのお話を聞かせていただけないでしょうか？この方は三角兵舎で刺繍をされていたのでしょうか？」

永崎氏 「三角兵舎は木を伐採してそこに兵舎を作っていましたので、所々切り株があったんですね。飛行靴を履いて、飛行服を着たままでそこに腰掛けて、一生懸命刺繍をしてい

ました。日本刺繍ですので、枠が大きくて四角いんですね。色んな色糸が一杯あってカラフルなんですけど、私たちが見た時はそこに「ハセベリ」まで白い糸でカタカナで刺繍してらっしゃいました。

お名前は存知あげなかったんですが誰かが兵隊さんは何隊ですか？と聞いたら『ブヨウ隊です』とおっしゃったんです。それで『踊りの舞踊ですか？』と聞いたら『武を揚げ、武揚隊です』とおっしゃって、はーそうなんだーと思って、皆でその刺繍を見ました。とてもお上手で、男性の方がなさるので、私たち女学生は五年生で日本刺繍をしますので、日本刺繍が非常に珍しくて、円形になってみんなで見えていました。

それで戦後、お姉さんに長谷部さんの遺品の中に刺繍で長谷部さんのお名前が刻まれたものがありましたか？とお伺いしたら、ありませんと言う事でした。

だから、自分でお持ちになったんじゃないかと思えますね。それはきれいでしたよ、当時、カラフルはない時代でしたのでとってもきれいな刺繍を見させていただきました。」

八卷 「四月十八日で特攻隊のお世話がなくなりますけど、その後はどうされたのでしょうか？学校が再開されたのでしょうか？」

永崎氏 「学校の生徒と先生方が入る防空壕を校舎の裏に掘りました。一番奥の方に校長先生が特攻神社を作るとおっしゃったんですよ。それで、とにかく長い、風部隊の防空壕のように大きくはないんですが、人が立って入れる程度の防空壕で、ずっと奥まで長く、そして一番奥を一段高くしてありました。そこに特攻神社をお作りになったのかそこまで

は私共は確かめていないんですけど、校長先生が時々見学にいらしてました。

入り口の者が『警戒警報発令!!』と言うと、そこで一生懸命作業したんですよ。その他の時はちょっと遊んだりしていました。軍のは厳しかったですが、学校の防空壕ですから皆適宜休んだり、ゆっくり掘ってましたね。」

八卷 「戦争を知らない世代に、特攻隊員とはこういう人だったよとか、特攻作戦とはこういうものだったよと永崎さんの言葉で説明されるとどのようになるでしょうか？」

永崎氏 「普通の方々、特別な方々ではなくて、本当に普通の方々が戦争になると、みんなある日突然命令が降りて、すべてを、学問も途中で断念し、ご兄弟やお父さん・お母さんもいらっしやるのに辛い別れをして祖国のために戦場に行かなければならないんです。

そういった厳しい時代があって、ご家族はもちろんのこと、みんな当時の事が胸の中に残ってしまって、忘れられない思い出としてずっと今も引きずっているような状態なんですよね。

だからもう絶対、こういった時代が二度と来ないように、そして戦争のために何かを断念するのではなくて、本当に自分で進みたい道を進んで自分の願いや希望をかなえて、すばらしい人生を送って頂きたいと願っています。

戦争は軍人さんだけでなく、ご家族も、それこそ小さいお子さんにいたるまでも全部巻き込んでしまうということとを皆さんに知っていただきたいです。」

三．考察

（一）奉仕作業に就いた女学生

当時の知覧町には、女性に対し中等教育を行う学校として唯一、知覧高等女学校が設置されていた。学校の沿革は大正十年に知覧村立知覧実科高等女学校として開校、修業期間は二年間であった。大正十三年に修業期間が三年に延長され、昭和十八年（一九四三）には高等女学校令の改正により鹿児島県知覧高等女学校に変更し、修業期間も五年間になった。

昭和二十四年（一九四九）には学制改革により一・二年生は併設中学校に、上級生は知覧高等学校（現在の鹿児島県立薩南工業高等学校）に移籍し、歴史に幕を閉じた。二十八年間で千四百八十七名が卒業した。

三角兵舎への奉仕作業に就いた生徒は昭和十八年四月に入学し、昭和二十年四月で三年生に進級した学年である。

戦争の激化により、昭和十九年（一九四四）より通年で中等学校以上の生徒に学徒勤労動員が課せられ、軍需工場での生産活動、地区の軍事施設での奉仕作業、食糧増産などに従事した。

昭和二十年四月時の知覧高等女学校の四、五年生は長崎県の川棚海軍工廠や知覧飛行場の大刀洗陸軍航空廠知覧分廠に動員されていた。下級生は知覧に残っていたが学業は停止され、農作業や防空壕掘りに従事していた。

そのような状況の中、知覧に残る最上級学年である三年生に三角兵舎への奉仕作業が割り当てられたのである。

奉仕作業の要請は軍からあったはずだが、誰の発案でどの部隊が依頼したのか、その経緯を示す記録は確認出来ず、はっきりしない。ただ、知覧高女なしこ会が編集した「群青」に、初日の三月二十七日は「役場の山口さん（知覧町役場学務課長）を先頭に先生、

生徒」で行ったとの記述があるので、軍からの要請を受けた知覧町役場では学務課長が窓口となり、知覧高等女学校長に依頼し、学校長が引率の教諭と作業に就く学年を決め、教諭が生徒を選したと考えられる。

引率の教諭は岩脇ヨシ子、帖佐潤子の二名であった。三年生の生徒は百十三名いたが、まず学校に近い知覧校区の十八名が指名され、特攻隊の担当として九名、飛行戦隊の担当として九名の二班に分かれ、奉仕に就いた。

日記を書いた前田笙子は特攻隊を担当した。当初は少人数だったが、前進して来る特攻隊員の人数が増加してくるとそれに応じて生徒も増員され、最終的には百名ほどになった。百名が十班に分けられていたので一班はおよそ十名で構成されていたと考えられる。

なお、この時期、知覧には飛行第五十九戦隊、六十五戦隊、百三戦隊の飛行隊が所在した。

表1 知覧高等女学校教職員一覧

氏 名	担当科目	備 考
宇都 純忠	公 民	校長
松田 善助	数 学	教頭
竹下 景勇	国 語	
内門 純義	歴 史	
森田 秀清	英 語	
林 覚志	数 学	
米山 勝己	生 物	
菊永 重孝	書 道	昭和19年に召集
神山 杉雄	音 楽	
深町 純清	英 語	
丸野 勝	作 文	
大谷 香志行	体 育	
南谷 国時	物 理	
有木 静	農 業	
瀧川 碇信	事 務	
黒岩 幸	家 庭	
岡元 則子	保 健	
岩脇 ヨシ子	和 裁	引率した教諭
帖佐 潤子	洋 裁	引率した教諭
上野 裕子	保 健	
岩崎 美喜子	家 庭	
村永 エツ子	用務員/事務	

表2 3月27日から三角兵舎での奉仕作業に就いた女学生

	氏 名	備 考		氏 名	備 考
特攻隊の担当	岩脇 ヤス		飛行戦隊の担当	安楽 しおり	
	岩脇 福子			迫 ツル子	
	折田 リフ			高城 ミツ子	
	清藤 良子			帖佐 房子	
	佐多 よね子			寺師 サト	
	辻 秀子			鳥濱 礼子	鳥濱 トメの娘
	平田 祥子			松村 知子	
	前田 笙子	2組級長 日記の筆者		森 カヨ子	1組級長
	森 要子			森 幸子	



写真1 三角兵舎地区空中写真（昭和20年7月22日 米軍偵察機が撮影）

飛行場の戦闘指揮所から南へ約1km離れた松林の中に三角兵舎が建てられていた。
終戦後に米軍に提出した報告書によると35棟（収容人数1500人）の三角兵舎があったと記録されている。
ここには特攻隊員の他、司令部要員、掩護部隊員など飛行場に勤務する人々が宿泊していた。特攻隊員を取
材に来た報道班員（新聞記者）が詰めていた兵舎もあった。
炊事場や食堂、風呂や物資を保管する倉庫など生活を営むためのあらゆる建物があり、慰問用の舞台もあっ
た。特攻隊員はここを拠点に生活し、軍用トラックで町に出るなどして数日を過ごした。

(二) 特攻日記に登場する特攻隊

日記には四隊、二十六名の名前が確認出来る。そのうち十二名が特攻戦死しているが、十四名は特攻機を空襲で失ったり機体の不良により出撃を果たせず生き残り、終戦を迎えている。

隊名、名前の登場を纏めたのが表4である。日記に「少尉と個人名の記述があったものには●を、」振武隊と複数名を指している場合はその時知覧にいたであろう隊員全員に○を表記している。

表を見て分かるように、三月二十九日から四月三日までは第三十振武隊、四月七日から四月十八日までは第六十九振武隊に専従している。

四月十七、十八日と第三十一振武隊の長谷部伍長が登場するが、直接担当していたわけではなく、受持ちの隊の近くに宿泊していたため交流を持ったようである。

第二十振武隊

昭和十九年十二月八日、敵機動部隊が本土に來襲するとの情報により急遽、第十一飛行師団の担任で第三振武隊として大阪の大正飛行場で編成された。

長谷川 實大尉を隊長とする総勢十二名で飛行機は一式戦闘機であった。敵の來襲がなかったので出撃はなかったが編成はそのままにされ、北伊勢飛行場、海軍の大分飛行場で特攻の訓練を実施した。

昭和二十年二月八日、第六航空軍の指揮下に入り、第二十振武隊と改名。三月二十七日に知覧に前進し、二十九日、三十日で隊の主力は徳之島に前進した。

日記に名前のある大平少尉、穴澤少尉は徳之島に前進し得なかった隊員である。名前は出てこないが寺澤軍曹は一度徳之島に前進したものの着陸時に乗機を大破、連絡便で知覧に戻り、前記の二名と

共に四月十二日に知覧飛行場から出撃した。

第三十振武隊

昭和二十年二月、天号作戦に向けて第一次編成された三十二隊のうちの二隊である。第一航空軍の担任でと号第三十隊として朝鮮半島の泗川飛行場で編成された。

大櫃 茂夫中尉を隊長とする総勢十二名で飛行機は九九式襲撃機であった。当初はシンガポールに司令部を置く第三航空軍に配属される予定で紀元節の二月十一日に出陣式を行い、泗川を出発した。

岐阜県の各務ヶ原飛行場で特攻機を受領するが、ここで大きな悲劇があった。隊員の一人、佐藤 悌二郎兵長が飛行場で乗機を整備中、墜落事故により飛んできた飛行機の破片で片足を切断する大怪我を負い殉職してしまった。遺体は茶臼に付せられ、分骨された遺骨を大櫃隊長が携えた。

その後、熊本県の菊池飛行場を経由し、朝鮮半島の大邱まで移動したがそこで急遽、行き先が知覧に変更となった。これは、沖繩への艦砲射撃が三月二十四日から始まり、その方面への上陸が確実なものとなったからである。

三月二十六日に知覧飛行場に前進し、知覧に到着した最初の特攻隊となった。四月三日に徳之島飛行場に向かうも空襲を受けていたために行き先を変更し、海軍の喜界島飛行場に着陸。同地も激しい空襲を受け、隊員の多くは特攻機と共に出撃の機会も失った。

誠第三十一飛行隊／第三十一振武隊

昭和二十年二月、第一次編成として第二航空軍の担任でと号第三十一隊として満州国の新京飛行場で編成された。

山本 薫中尉を隊長とする総勢十二名で飛行機は九九式襲撃機で

あった。台湾の第八飛行師団に配属される予定で紀元節の二月十一日に編成式を行い、岐阜の各務ヶ原航空廠で爆装の改修を実施した。その後、上海経由で台湾に進出し同地から出撃した。

長谷部伍長は発動機の不調で各務ヶ原航空廠に残留、戦況の急変で本隊に追従することが出来なくなり、一人だけ第三十一振武隊となって知覧から出撃した。

第六十九振武隊

昭和二十年三月、第二次編成された六十九隊のうちの二隊である。明野教導飛行師団の担任で編成され、それと同時に第六航空軍に転属した。

池田 亨少尉を隊長とする総勢十二名で飛行機は九七式戦闘機であった。陸士、幹候、特操の出身者で構成され、全員が将校であった。編成後、速やかに知覧に進出する必要から数機ずつに分かれて移動を開始。三月二十九日の編成から早い隊員は僅か一週間ほどで知覧に進出し、その六日後には出撃を行っている。

表3 隊員名簿（名前の左に★がある隊員は、日記に名前が登場する隊員）

第20振武隊

氏 名	出身期	状況	出撃地/戦死場所
長谷川 實大尉	航士55期	特攻戦死	徳之島 (4/2)
吉田 市少尉	航士57期	殉職	奄美大島 (3/30)
伊藤 忠雄少尉	幹候 9期		
熊谷 吉彦少尉	特操 1期		
瀧村 明夫少尉	特操 1期		
★大平 誠志少尉	特操 1期	特攻戦死	知覧 (4/12)
山本 英四少尉	特操 1期	特攻戦死	徳之島 (4/2)
★穴澤 利夫少尉	特操 1期	特攻戦死	知覧 (4/12)
山本 秋彦少尉	特操 1期	特攻戦死	徳之島 (4/1)
★寺澤 機一郎軍曹	少飛10期	特攻戦死	知覧 (4/12)
重政 正男軍曹	少飛12期	特攻戦死	知覧 (5/4)
小島 五朗伍長	少飛13期		

第30振武隊

氏 名	出身期	状況	出撃地/戦死場所
★大櫃 茂夫中尉	航士56期		
★宮崎 彦次少尉	特操 1期		
★横田 正顕少尉	特操 2期		
★今井 實伍長	少飛14期	特攻戦死	喜界島 (4/15)
★池田 強伍長	少飛14期	特攻戦死	喜界島 (4/13)
★福家 義信伍長	少飛14期		
★後藤 正美伍長	少飛14期		
★岩間 勝巳伍長	少飛15期		
★佐々木 勇伍長	少飛15期		
佐藤 梯二郎兵長	少飛15期	殉職	各務ヶ原 (3/10)
★河崎 広光伍長	航養14期		
★横尾 賢二伍長	航養14期	特攻戦死	徳之島 (4/10)

誠第31飛行隊／第31振武隊

氏 名	出身期	状況	出撃地/戦死場所
山本 薫中尉	航士56期	特攻戦死	八塊 (5/13)
中村 敏男少尉	幹候 期		
五十嵐 榮少尉	幹候 9期	特攻戦死	八塊 (5/13)
高畑 保雄少尉	幹候 9期	特攻戦死	八塊 (5/17)
藤井 清美少尉	幹候 9期	特攻戦死	八塊 (7/19)
長谷川 信少尉	特操 2期	戦死	与那国島 (4/12)
力石 丈夫少尉	特操 2期		
西尾 勇助軍曹	航養14期	戦死	与那国島 (4/12)
五来 末義軍曹	航養14期	特攻戦死	八塊 (5/17)
柄沢 甲子夫軍曹	航養14期	特攻戦死	八塊 (5/17)
吉原 香軍曹	航養14期		
飯沼 芳雄伍長	少飛14期	殉職	宮古島 (7/19)
春田 正昭伍長	少飛14期	殉職	松本 (3/9)
★長谷部 良平伍長	少飛15期	特攻戦死	知覧 (4/22)
海老根 重信伍長	航養14期	戦死	与那国島 (4/12)
大石 三重信			

第69振武隊

氏 名	出身期	状況	出撃地/戦死場所
★池田 亨少尉	陸士57期	特攻戦死	知覧 (4/12)
★山下 哲少尉	幹候 8期		
★岡安 明少尉	幹候 8期	特攻戦死	知覧 (4/12)
★柳生 諭少尉	幹候 9期	特攻戦死	知覧 (4/12)
★本島 桂一少尉	特操 1期	特攻戦死	知覧 (4/16)
★中山 力造少尉	特操 1期		
★渡辺 忠義少尉	特操 1期		
★河村 巖美少尉	特操 2期		
★堀井 友太郎少尉	特操 2期		
★渡井 新少尉	特操 2期		
明田 勇少尉	特操 2期		
★持木 恒二少尉	特操 2期	特攻戦死	知覧 (4/12)

表4 各隊員の日記への登場状況

隊 名	氏 名	航空総攻撃以前の攻撃											1次
		3/26	3/27	3/28	3/29	3/30	3/31	4/1	4/2	4/3	4/4	4/5	4/6
第20振武隊	大平 誠志少尉		→知										○
	穴澤 利夫少尉		→知										●
	寺澤 幾一郎軍曹		→知		→徳				→知				○
第30振武隊	大櫃 茂夫中尉	→知 6機			●	○	○		●	→喜 ●			
	宮崎 彦次少尉				○	○	○		●	○ →喜			
	横田 正顕少尉				○	○	○		●	→喜 ●			
	今井 實伍長				○	○	○	●		→喜 ●			
	池田 強伍長				○	○	●		●	○ →喜			
	福家 義信伍長				○	○	●	●	●	○ →喜			
	後藤 正美伍長				○	○	○		●	○ →喜			
	岩間 勝巳伍長				○	○	○			● →喜			
	佐々木 勇伍長				○	○	●			○ →喜			
	河崎 広光伍長				○	○	○			●	●		
	横尾 賢二伍長				○	○	○			● →喜			
第31振武隊	長谷部 良平伍長												
第69振武隊	池田 亨少尉												→知
	山下 哲少尉												
	岡安 明少尉												→知
	柳生 諭少尉												
	本島 桂一少尉												→知
	中山 力造少尉												
	渡辺 忠義少尉												
	河村 巖美少尉												
	堀井 友太郎少尉												
	渡井 新少尉												→知
	持木 恒二少尉												

隊 名	氏 名	第1次航空総攻撃					第2次航空総攻撃				第3次航空総攻撃		
		4/7	4/8	4/9	4/10	4/11	4/12	4/13	4/14	4/15	4/16	4/17	4/18
第20振武隊	大平 誠志少尉		●				戦死						
	穴澤 利夫少尉		●				戦死						
	寺澤 幾一郎軍曹						戦死						
第30振武隊	大櫃 茂夫中尉												
	宮崎 彦次少尉												
	横田 正顕少尉												
	今井 實伍長									戦死			
	池田 強伍長							戦死					
	福家 義信伍長												
	後藤 正美伍長												
	岩間 勝巳伍長												
	佐々木 勇伍長												
	河崎 広光伍長			●		○	●					●	→福
	横尾 賢二伍長				戦死								
第31振武隊	長谷部 良平伍長											●	●
第69振武隊	池田 亨少尉	○			●	●	戦死						
	山下 哲少尉						→知	●	○		●		● →福
	岡安 明少尉	○			●	●	戦死						
	柳生 諭少尉					○ →知	● 戦死						
	本島 桂一少尉	○	●		●	●	●		●	●	● 戦死		
	中山 力造少尉						→知	●	○		●		●
	渡辺 忠義少尉						→知	●	○		●	●	●
	河村 巖美少尉						→知	●	○		●		
	堀井 友太郎少尉						● →知	●	○		●	●	● →福
	渡井 新少尉	○	●		●	●	●				●	●	● →福
	持木 恒二少尉					○ →知	● 戦死						

【 記 号 】 ●：日記に個人名の記述があるもの。

○：～振武隊と複数名を指しているもの。(その時知覧にいた隊員全員を表記)

→知：知覧に移動、→徳：徳之島に移動、→喜：喜界島に移動、→福：福岡に移動

（三）特攻日記から読み取れる事象

個人の日記は、基本的に他者に読まれることを想定していないので、その時の状況を知らなければ内容の理解が難しい。

特攻日記においても、多くの人名、場所を示す言葉、作戦の状況が出て来るので、隊員名、地理、特攻作戦についての知識がなければその理解が難しい箇所がある。

本項は完全ではないものの、日記を検証し、読み解いたものである。

日記を書いた前田 笙子は特攻隊員の事を忘れてはいけなさと、自分の記録のために書き残すことを決め、交流を持った日から奉仕作業が始まった日まで数日通り、書き始めた。それ以降はその日のうちに、三角兵舎地区にあった食堂、又は自宅で記している。当時十五歳の女学生が目にし、感じたことが率直に書き残されている。

『三月二十七日（火曜日）』

前日の二十六日に米軍は慶良間列島に上陸を開始、日本軍は航空兵力を主体とした天号作戦を発動させ沖縄戦が始まった。この日、知覧に最初の特攻隊として第三十振武隊が進出した。

「作業準備をして学校へ行く」とあるがこれは、女学校の横に軍の防空壕を掘る作業に従事しており、この日もそのつものの格好で出校したためである。教諭より特攻隊へ給仕に行く事が告げられ、失礼のないように作業着から制服に着替えている。

三角兵舎まで歩いて行かれているが広大な飛行場を挟んだ先にあるのでその距離は直線距離でも学校からは4kmも離れている。初日は軍の担当者より、兵舎の布団作りを教えてもらい、それだけで終わっている。

『三月二十八日（水曜日）』

この日から特攻隊員の身の回りの世話をするはずだったが、気恥ずかしさと当時は異性との交流が憚れる風潮だったので行けずに終わっている。また、鹿児島弁でしか話せないの、言葉の壁も気にしていた。

『三月二十九日（木曜日）』

第三十振武隊員への奉仕の第一日目。

三角兵舎地区を南北に隔てるように低地があり、小川が流れていた。そこで手洗いで洗濯をおこなっている。

現在、この周囲は杉林に変わっているが、当時は松林であった。大櫃中尉は第三十振武隊大櫃隊歌を作っているのでこのような歌と一緒に歌ったと考えられる。

『三月三十日（金曜日）』

第三十振武隊は知覧を経由し、徳之島に前進する計画になっていた。その出発に際し、桜を渡しているが、九州南部は桜が満開の時期である。桜は前田 笙子の自宅に近い恵比寿神社か花井手公園、もしくは三角兵舎地区へ向かう途中にある豊玉姫神社から入手したと考えられる。貨物とはトラックのこと。

知覧を離陸し、一路徳之島に向けて南下するが、途中で大櫃中尉は天候悪く視界不良と判断し、引き返した。

『三月三十一日（土曜日）』

「今日は一日のんびりと」とあるが、第三十振武隊は前日の出発前に身辺整理を既に済せているので時間的余裕があった。女学生に身の上話をするなどして、一日を過ごしている。

日記の三十三ページから四十ページまでに交流を持った隊員の出身地、留守家族の名前が書かれている。後ろのページから第三十振武隊員、第六十九振武隊員、第二十振武隊員、前記で書かなかった第六十九振武隊員の順で書かれている。地獄縣三途川區三町（丁）目草場陰は佐々木、池田、横尾、斎藤の連名で書かれている。

『四月一日（日曜日）』

飛行場大隊の補給中隊が管理していた地区に第三十振武隊の三角兵舎があり、その道沿いに松の太木があった。その幹に今井伍長、福家伍長が文字を刻んだ。現在、この地区は杉林に変わり、この松の木も残っていない。岩脇さんは岩脇ヤスのことで、三月二十七日から一緒に特攻隊を担当した一員である。

この日、米軍は沖繩本島に上陸を開始、北及び中飛行場を占領した。知覧飛行場から最初の特攻隊（第二十三振武隊）が出撃した。

『四月二日（月曜日）』

森さんは森要子、特攻隊を担当した一員でよく前田 笙子と行動を共にした友人。

第三十振武隊は徳之島前進のため知覧を飛び立つが悪天候のため途中で引き返す。宮崎少尉機、大櫃中尉機及び後藤伍長機の不調、福家伍長機の爆弾が脱落するなど万全ではなかったことが伺える。

「自分一人なら突込んで行くんだが整備兵を乗せてゐたので」とあるが第三十振武隊には整備兵が六名随行していた。九九式襲撃機は二人乗りのため徳之島まで同行を計画していたようだ。

この頃、特攻を指揮する第六航空軍は米軍の上陸作戦の初動を叩くため徳之島への前進、速やかなる出撃を急がせていたが必ずしも計画通りにいかなかったことがこの隊の状況を見ても推測できる。

やるせない思いを晴らすため兵舎で歌をうたうが、池田伍長が歌った歌詞は「桃太郎」で、日記とは別にある小冊子「振武隊の方々とうたわれた歌の数々」にも載っている。

『四月三日（火曜日）』

三月三十日と四月二日に徳之島への前進を断念し、再びの試みである。この日、知覧からは第二十二振武隊、第三十振武隊、第四十六振武隊、飛行第五十九戦隊が午後三時十分～四時十分の間に飛び立った。

横尾伍長は、黄疸を発病し知覧に残留することになった河崎伍長の事を気にしている。二人は航養十四期出身の同期であったため、特に仲間意識が強かった。

大櫃中尉が「部下の骨を背に出撃」とあるが、これは特攻機を受領した各務原で殉職した佐藤兵長の遺骨であり、無念の死を晴らすため携えていた。

岩間伍長の書置きは、兵舎の屋根で月明りの中で教諭と女学生に宛て書かれたもの。そこには奉仕への感謝、特攻に臨む思いが強い文面で書かれている。この書置きは前田 笙子が預かり、現存している。

徳之島飛行場は敵艦載機の空襲を受けていたので急遽、喜界島飛行場に変更し、全機無事に到着した。

『四月四日（水曜日）』

三角兵舎地区の北側は飛行場大隊の警備中隊が管理していた。そこには報道班員が詰めていた兵舎があったので布団を取りに行った際に記者に捕まり、取材を受けている。「幾人もの新聞記者に取り巻かれて」とあるので何社からも取材を受けたようだがそのうちの

一つ、鹿児島日報では昭和二十年四月十九日の紙面にこの時の記事が掲載されている。「素朴な室に花一輪 出撃前の神鷲を語る 勤労の女学生たち」との見出しで川越特派員が報告している。

地名を伏せるため〇〇基地、〇〇高女としてあり、取材した女学生の名字（前田さん、辻さん、平田さん、森さん、佐多さん、岩脇さん、安さん）と共にコメントを紹介している。特攻隊を担当した前田笙子、辻秀子、平田祥子、森要子、佐多よね子と考えられる。岩脇姓は二名いるためヤスカ福子か判別できないが、ほぼ全員の名前が確認出来る。安さんについては判明できなかった。

『四月五日（木曜日）』

六日に陸海軍航空協同の航空総攻撃が計画され、九州南部の飛行場には特攻隊が集結し、攻撃の準備が進められた。第六航空軍司令官が知覧に向いて特攻隊を激励するなど張り詰めた空気が漂ったはずだが、日記からはその物々しさは感じられない。

四日、五日、六日に連続して整備兵の事が出て来る。第三十振武隊は第三十教育飛行隊から編成されているが、教育飛行隊の整備兵から六名選抜され、行動を共にしていた。特攻隊員との付き合いも長く、機体への愛着も持っていた。このように専属の整備隊が同行するのは珍しく、他の隊は各飛行場に配置されていた整備隊が対応している。

知覧には飛行場大隊、独立整備隊、航空分廠などの整備隊が所在していたが、受入れ能力以上の特攻機が飛来し、不眠不休での整備に追われていた。

『四月六日（金曜日）』

航空総攻撃の第一日目。知覧、万世をはじめ徳之島や喜界島の前

進基地から攻撃を行うよう計画されていた。三日に知覧を飛び立った第三十振武隊もこの攻撃に参加するだろうと、同行した整備兵と一緒に祈りを捧げている。森さんはいつも行動を共にした森要子。初めて受け持った隊員の死に対し「二、三日前までは元気でいらっしやた方々が今は、敵艦へ体当たりなさって此の世へはいらっしゃぬのだと思ふと仕事に何も手がつかず」とあるように、心の動揺が伺える。しかし、徳之島、喜界島は終日敵機の空襲を受け、出撃は断念されている。

『四月七日（土曜日）』

「見馴れぬ方が四、五人」とは、前日に菊池から知覧に前進してきた、第六十九振武隊長の池田少尉（22歳）の他、岡安少尉（24歳）、本島少尉（22歳）、渡井少尉（歳）の四名である。

「今度きた方みんなお年を召した方だけね、あんな年を召した方でも特攻隊なんでせうか」と女学生の間で囁いている。

二十代前半の青年も、十四、十五歳の女学生からしたらずいぶん年上に見えたようである。

『四月八日（日曜日）』

第六十九振武隊の本島少尉、渡井少尉と第二十振武隊の穴澤少尉、大平少尉との交流。第二十振武隊員は、用事がないのに洗濯物があると女学生を呼び出し、語っている。六日と七日に出撃したものの天候不良などで帰還し、死を目前にしているはずだが、隊員の言動からは不思議とその緊迫感を感じられない。

飛行機の整備、身の回りの世話は他の人がやってくれ、出撃基地での特攻隊員は身辺整理と英気を養うことが中心となるので比較的時間の余裕を持つことが出来た。

『四月九日（月曜日）』

河崎伍長は四月三日に黄痘を発病し、他の隊員が喜界島に前進する中、取り残されていた。一週間ほど療養しこの頃にはほぼ回復した。

同行の整備兵が、飛行機のバッテリーを使い、魚を感電させて魚取りをした様子が書かれている。

『四月十日（火曜日）』

地元の慰問団が霜出国民学校（現、南九州市立霜出小学校）の講堂で日本舞踊やタップダンスを披露した。それを第六十九振武隊員と共に見学に行っている。学校は三角兵舎地区より約一・五kmと飛行場に近い場所にあった。永崎氏の聞き取り調査にもその時の話が出て来る。

キャベツは甘藍、玉菜とも言われたがその呼び名が話題となっている。現在ではキャベツが一般的だが、出身地や家庭によりその呼び名が様々であった。

慰問団の出し物を三つほど見学し、一旦兵舎に戻ってから町に外出している。三角兵舎地区からは軍用トラックによる定期便が出ており、それを使って隊員たちは外出していた。

『四月十一日（水曜日）』

六十九振武隊員は十二名中四名しか知覧に到着していなかった。この日は後続として五名が到着する予定だったが、実際は柳生少尉と持木少尉の二名しかたどり着けなかった。機体の不調、天候不良とその原因は色々と考えられるが、国内の移動でも困難が伴ったことが読み取れる。それだからこそ、先に到着していた四名は戦闘指

揮所で待機して戦友の到着を待ちわび、双方再会を喜んだのである。

その晩は三隊合同の壮行会が食堂で開催された。翌日は第二次航空総攻撃の開始日で、出撃が決まっていたので壮途を祝い、最期の晩餐が開かれたのである。通常、女学生の奉仕作業は午後五時半までだがこの日は特別に午後九時まで延長された。

酒を飲み、食事をとり、歌をうたい、「今夜はにつこり笑って酔ひ戯れていらつしやる姿を拝見した」とあるように、隊員たちは賑やかにしていたようだが、女学生は明日までの命という事を知っていることもあり、気丈に振る舞うその姿を見てなおさら感傷的になり、涙を流している。特攻隊員として征く側の振る舞いと、見送る側の真情がこの記述から読み取れる。

『四月十二日（木曜日）』

第二次航空総攻撃の第一日目。特攻隊の最大の障害は、敵の邀撃機であった。四月一日に沖繩の北及び中飛行場を米軍が占領すると速やかに整備し、特攻隊を迎え撃つ体制を整えつつあった。その対策として特攻実施前に飛行場の制圧が検討され、沖繩の第三十二軍の飛行場への砲撃、重爆隊による爆撃、戦闘隊による敵機の牽制及び援護のもと、特攻隊が突入するように計画された。

担当した第六十九振武隊が出撃するので軍用トラックに同乗し、飛行場に同行している。ここで操縦席を桜で一杯にしている機を目撃し、自分たちも差し上げたいと、自宅もしくは花井手公園から持参していた桜を兵舎に取りに戻っている。戦闘指揮所から三角兵舎までは約1km離れているので往復すると三十分はかかったと考えられる。そのため、戻った時には池田少尉機を始め岡安少尉、柳生少尉、持木少尉は離陸を開始する出発線まで移動しており、皆から遅れた本島機が後を追っている状況だった。

「操縦者がちらつと見える」とあるが主滑走帯は出発線から北西方向にあり、離陸する機が戦闘指揮所前方を通過するのでその様子を見たようである。

その後、第二十振武隊の穴澤少尉機が出発線に向かうために目の前を通過、第六十九振武隊員に差し上げるはずだった桜を振って見送った。その際、「パチリ・・・後ろを振り向くと映畫の小父さんが私達をうつして満足してゐる」とあるように、この場面を毎日新聞社の記者が写真に収めている。

特攻隊を見送り、兵舎に戻ろうとすると先ほど、出撃したはずの本島少尉、渡井少尉と行き会う。両名とも機体に問題があつて出撃を断念したのである。本島少尉は地上滑走して出発線に向かう途中で爆弾が脱落、渡井少尉の原因は定かではないが、出発線にも進めていないのでその前の準備線で発動機の出力が上がらないなど、不具合が出たものと考えられる。

出撃が果たせず、仲間に取り残された状況から女学生の前で涙を見せている。出撃を断念した直後の感情をあらわにしている様子を第三者が目撃し、その日のうちに記録しているものは他になく、隊員の心情を知るうえで貴重な記述と言える。

この日、後続の山下少尉、中山少尉、渡辺少尉、河村少尉、堀井少尉が知覧に前進してきた。沈痛な雰囲気を晴らすため堀井少尉が冗談を言っても、本島少尉は「隊長さんを思い出すと泣けるから黙っててくれ」と塞ぎ込んでいる。池田少尉を慕い、強い信頼関係が築かれていたことが読み取れる。

『四月十三日（金曜日）』

一晚経過し、本島少尉、渡井少尉の感情も落ち着きを見せている。副隊長の山下少尉が部下を叱り、鼻先で命令するので部下との溝が

出来ていたようで、隊内の人間関係が伺える。その雰囲気は女学生も感じている。山下少尉は幹候、他の隊員は特操の出身と、飛行兵の出身の違いから来ていることも考えられる。なお、女学生が投げた縛帯とは、落下傘と体とを固定する带状の装着具である。

『四月十四日（土曜日）』

第六十九振武隊員に書置き、辞世を書いてもらっている。日記の十八から三十二ページに直接書かれたもの、別紙に書かれ張り付けられたものが残されている。

誘導路の脇に無蓋型の掩体壕がいくつも築かれ、整備兵は昼夜を問わずその中で飛行機の整備に当たっていた。発動機の試運転も行われ、周囲にはその爆音が響いていた。

『四月十五日（日曜日）』

十六日に第三次航空総攻撃の実施が決定される。特攻隊約五十機を以て海軍の特攻隊と共に午前九時三十分から十時の間に沖縄周辺の敵艦船への攻撃が計画された。第六十九振武隊もその一翼を担うことから隊員たちは身辺整理を行っている。

本来、特攻隊の出撃計画は秘密ではあるが、親身に身の回りの世話をし、交流を持ったことにより信頼関係が築かれ自然な会話の中で知り得たものと考えられる。

本島少尉の言動として「明日は隊長の後を追ってあの世へ征いけると大変喜んで」とある。慕った隊長の後に続ける想いを吐露している。

この言葉は、男子は軍人になってお国のために役に立ち、命を捧げて当然という当時の風潮と共に、空中勤務者、特に戦闘隊員はその道に進んだ時点で死と隣り合わせとなり、いつ死んでも本望とい

う考え方と併せて考察する必要がある。

『四月十六日（月曜日）』

第三次航空総攻撃の第一日目。

出撃が午前六時過ぎに計画されていたことから午前四時に森さん（森要子）が迎えに来ていた。町の中心に永久旅館、内村旅館、富屋食堂があったので町に泊まった隊員を迎えるための軍用トラックが出されていたので同乗させてもらい、飛行場に向かっている。永崎氏の聞き取り調査によると、奉仕の帰りに乗せてもらうことは何度かあったが、行きで乗せてもらったのはこの日だけだったとのことである。

隊員の中に胸に殉職された方の遺骨を抱いている方がいる。どの隊の誰かは判明できなかったが、四月三日に出撃した大櫃中尉も殉職した部下の遺骨と一緒に飛び立っている。

思いを果たせず殉職した隊員の無念を晴らすため同じ隊の者が遺骨を抱き、一緒に出撃した事例はいくつも確認出来る。

「りりしい姿のお兄様方が戦闘指揮所前に並んでゐらっしゃる。」とあるが、前夜に第六航空軍の司令官が福岡から知覧に赴き、十六日の午前五時二十分から本日出撃する隊員に対し訓示を行っているので、その様子を書かれている。

午前六時から各隊は出撃を開始するが永崎氏の証言によると、この日は南北方向にある副滑走帯が使われ、飛行場の格納庫がある場所から見送ったとのことである。

日記によると第六十九振武隊は山下少尉、本島少尉、中山少尉、渡辺少尉、河村少尉、堀井少尉、渡井少尉の七名が出撃、しかしながら本島少尉、河村少尉以外は知覧に引返している。

「午前九時半、本島さんと・・・、河村さん・・・無事体当たりなさっ

た頃」とあるように特攻機は知覧を離陸後、沖縄まで六百五十kmの航路を凡そ二時間半かけて飛行するが、そのようなことも知り得ている。沖縄に向かった二機だが、河村少尉は宝島付近で機体が不調になり引返し、中之島に不時着し生き残ることになる。

『四月十七日（火曜日）』

知覧町郷土誌によると、この日は警戒警報が発令され、敵機が上空を通過している。三月十八日の初空襲以来、三月は連日、警戒警報が発令されていたが四月に入るとばかりと止まり、十四日まで静かな日が続いた。しかし、十五日以降は連日、警戒警報が発令されるようになり、十七日は敵機が通過したので隊員たちも待避をするなど動揺している。

第三十一振武隊の長谷部伍長は食事の最中に慌てて壕に避難し、他の隊員、女学生から呆れられている。武揚隊とは第三十一振武隊の別名だがこの隊は本来、誠第三十一飛行隊として編成され、台湾から出撃しているが長谷部伍長は発動機の不調で一人だけ岐阜の航空廠に取り残されてしまい、戦況の急変により第六航空軍に配属されて知覧に前進してきた不遇な隊員である。

弱冠十八歳の隊員で頼る者もおらず、一人知覧で過ごした。記述がハセベリとカタカナなのは、長谷部伍長が切り株に腰掛け日本刺繍でハセベリヨウヘイ（長谷部良平）のハセベリまで糸を通していたのを見学していたからである。永崎氏の聞き取り調査にもその時の話が出て来る。

壕の中で堀井少尉が世間話をし、十五日に来た慰問団が歌った鹿児島県の民謡、おはら節を手ぶり身振りで踊って場を和ませている。池田少尉が出撃した十二日も落ち込む本島少尉、渡井少尉を元氣付けようと冗談を言うなど、陽気な性格が伺える。

赤崎さん（赤崎 トキエ）は四月六日から奉仕に就いた後続の女学生で第二十振武隊、第六十九振武隊を担当した。彼女が言われた「出撃だつてよ」はこの日、知覧から特攻機は出撃していないので中山少尉と渡辺少尉が乗機受領のため第六航空軍の司令部がある福岡まで飛行機で出発することを指していると考えられる。

山下少尉、堀井少尉、渡井少尉は翌日、汽車で向かうことになるが渡井少尉は「早く死んだ方が幸福だよ。俺達の様な死にそこないは苦勞するよ。福岡辺りまで行かねばならないからね」と度重なる出撃の断念で自嘲的なことをこぼしている。

夜に引率教諭の家に行き、トランプで遊ぶが池田少尉から形見としてトランプを譲り受けているのでそれが使われたと考えられる。

『四月十八日（水曜日）』

昭和四十年に廃線となったが知覧には南薩鉄道知覧線が伸び、終着駅が知覧駅であった。知覧駅から阿多駅経由で伊集院駅まで行き、鹿児島本線に乗り換えて博多駅まで行けるようになっていた。

「四、五日したらすぐ歸っていらつしやる」とあるように、福岡にあった第六航空軍の司令部で新たな乗機を受領し、すぐに知覧に戻ってくるつもりだったことがわかる。午前の便で堀井少尉、渡井少尉、河崎伍長、他数名が行かれ、山下少尉のみ午後の便で行かれている。

河崎伍長は飛行機の修理が済んだので知覧に戻ってくるが、他の隊員は司令部で乗機を貰う事が出来ず、他の部隊へ転出し終戦を迎えている。

「今當分特攻隊の方がいらつしやぬから明日からお休みのこと。」とあるように、この日で奉仕作業が終わっている。十八日は第三次航空総攻撃の最終日でそれから三日間特攻は中断される。

四月二十二日から第四次航空総攻撃が開始されるのでその後も多くの特攻隊員が前進し、出撃して行くのだが女学生の奉仕作業は再開されることはなかった。

四・特攻日記の資料的重要性

ここまで資料の紹介、日記筆者の聞き取り調査、考察を行ってきたが本項では、資料としての重要性を再考してみる。

まず、資料としての記述内容の確かさは、日記という特性上、日付ごとで章が区切られ、記憶の鮮明なその日のうちに書き留めているので内容は具体的で、真実性が高いと言える。そして、日付の他、隊名、個人名が記載されているので、他の資料と比較検証しても合致している。

次に、隊員の言動が本心だったのか。女学生は特攻隊員に奉仕をする立場で、特攻隊員にとってはお世話を受ける立場にある。そのような関係の中で数日とも言えども信頼関係を築く時間があり、相手は女性で自身より少し下の妹に当たる年齢層であったので話題が合い、良い話し相手になっていることから、心を許して本心を語ったと考えられる。日記の筆者が自身の記録のために綴ったものなので、内容を歪めるようなことも考えられない。

そして、三角兵舎地区は一般人立ち入り禁止となっていて、住民と特攻隊員との交流は慰問の時など、限定的であった。二十三日間にもわたって軍の施設内で直接交流し、その出来事を記録することは誰でも出来たわけではないので希少性が高いと言える。

死に直面した特攻隊員は家族に宛て遺書や手紙を残しているが、内地からの発信のため、郵便制度が機能しており、家族の元に届いている。制空権・制海権を失った外地や戦地からでは届かないことが多いので、戦死者の中でも多くの遺品が残る特徴があり、人物像

に迫りやすい。そのようなことから、特攻日記の考察を行うにしても、家族に届けられた遺書・手紙、当時の報道資料、生き残った隊員の手記、体験者の証言などで実際の状況を多面的に検証できる。

特攻日記は女学生が綴った個人の記録ではあるが、当時の公文書が残されていない中においては、それに匹敵する価値を有しているのではないだろうか。そして、公文書だけが歴史を伝える資料でもなく、このような個人的記録の方が人物像に迫り、その時代、その時の状況に置かれた人物が何を考え、どのような行動をとったかわかることが出来る。

特攻隊員最後の数日における、日常の細部が記されたこの記録からは、彼らの息吹が感じられ、その心境を探ることが出来る。このような要素を持つ特攻日記は、戦争や特攻の実情が記録された、重要な歴史資料と呼べるのではないだろうか。

おわりに

本稿は特攻日記を考察することにより、日記筆者の心情と共に特攻隊員の言動やその時の様子、隊員間の人間関係や人柄、軍の秘密事項である特攻隊の移動や出撃状況、特攻機の状態などについても知ることが出来た。

軍の公文書が残されていない中、女学生が残した記録と証言により、特攻の史実を明らかに出来る事が示せたと考える。

それでも、まだ多くの課題が残されている。

戦死された隊員の遺書や手紙、日記に知覧での出来事、女学生との交流が書かれたものはないか、女学生に預けた手紙にはどのような内容が書かれていたのか、生き残った隊員はその後どこでどのようにして終戦を迎えたのか、他の女学生の記録や手記との比較など、多くの解明すべき事柄が思い浮かぶ。

また、特攻日記に深く関連する資料でもある小冊子「振武隊の方々とつたわれた歌の数々」や岩間伍長から形見として受け取った書置きと合わせての分析も必要である。

本稿を第一歩とし、研究をより深化させていきたいと考えている。

参考文献

- ・知覧町郷土誌編纂委員会編『知覧町郷土誌』（知覧町 一九八二）
- ・戦後五十年記念誌刊行会『特攻のまち・知覧』（知覧町 一九九五）
- ・防衛庁防衛研究所戦史部『戦史叢書 沖縄・台湾・硫黄島方面 陸軍航空作戦』（朝雲新聞社 一九七〇）
- ・航空碑奉賛会『続 陸軍航空の鎮魂』（航空碑奉賛会 一九八二）
- ・菅原日記編集委員会『菅原將軍の日記』（偕行社）
- ・高木俊朗『知覧』（朝日新聞社 一九六五）
- ・高木俊朗『特攻基地 知覧』（角川文庫 一九七三）
- ・知覧高女なでしこ会『知覧特攻基地』（文和書房 一九七九）
- ・知覧高女なでしこ会『群青』（高城書房出版 一九七九）
- ・押尾一彦『特別攻撃隊の記録（陸軍編）』（光人社 二〇〇五）
- ・加藤拓『陸軍航空特別攻撃隊 各部隊総覧 第1巻 突入部隊』（自費出版 二〇一八）

（やまき・さとし 知覧特攻平和会館 専門員）

<要旨>

特攻日記とは、女学生が特攻隊員と接した日々を綴った記録である。1945（昭和20）年3月27日から4月18日までの23日間、知覧高等女学校の女学生が知覧飛行場に動員されて奉仕作業に従事した。三角兵舎地区で洗濯や縫物、兵舎の清掃などを行う中で、特攻隊員との交流も持った。女学生の一人、前田 笙子は特攻隊員の事を忘れてはいけなと、個人の記録として書き残すことを決め、奉仕作業に従事した間の出来事を日記に綴った。そこには自身の行動や心情だけでなく、接した特攻隊員の言動やその時の様子、隊員間の人間関係や人柄、そして、隊の移動や出撃情報までもが克明に書かれている。本稿では、特攻日記の原文を写真で掲載し、筆者である永崎笙子氏（旧姓：前田）への聞き取り調査を紹介する。そして、各日の記述内容の考察を行い、特攻作戦の一端を明らかにし、軍の公文書がほとんど残されていない中、個人の記録からどのような特攻作戦の実情が読み取れるのか、歴史資料としての重要性を検証した。

<Summary>

Analysis of the “Tokko Nikki” Kept by the Girl Students Looking After the Kamikaze Pilots

The “Tokko Nikki” were the daily records kept by the female students who spent time with the Kamikaze pilots during the days they looked after them. Between March 27th and April 18th for 23 days in 1945, the students from Chiran Girls’ High School were mobilized to the Chiran Airfield to engage in service work. As they tidied the barracks and did the laundry and sewing in the triangular barracks, they also interacted with the Kamikaze pilots. One of the girl students, Shoko Maeda decided to keep a personal record about what she saw and felt during the time she was there so that the Kamikaze pilots would not be forgotten. In her diary, she not only wrote about her own actions and feelings, but also faithfully recorded how the Kamikaze pilots behaved at such a time of their lives, the relationships they formed between each other, and their various personalities. She even recorded information about the movement of troops and the various sorties. In this paper, I have included photographs of the original text from the Tokko Diaries, and interviews with Shoko Nagasaki (maiden name Maeda) the author of this Tokko Diary. Because of the scarcity of official army documents, the importance of these documents is established, since it is through the study of these individual records that many details of the Kamikaze strategies used, and other facts about that time can be understood.